

幕末一僧侶の蔵書目録と書物に関する一考察

鍋島 由子

はじめに

近世では十七世紀に出版業者が登場し、十八世紀には書物が地域、身分を問わず多くの人々に受容されるようになったことは周知の通りである。近年では書物や出版についての研究が多くなされており⁽¹⁾、個人の蔵書についての研究も多数されている。たとえば、横田冬彦氏は元禄・享保期の大坂周辺村落・在郷町の上層農民や庄屋層の持つ蔵書に着目し、当時の村落社会において数百冊の蔵書を持つ家が珍しくないことを指摘した⁽²⁾。これらの蔵書は様々な分野の書籍で構成されており、かつ一部の分野については専門的な内容であることを指摘し、〈知的読

書〉として評価した⁽³⁾。また横田氏は、このような蔵書を持つ人々が、地域社会の中で経済的有力者や知的職業者などと幅広く書籍の貸借関係を有していたことを指摘した⁽⁴⁾。さらにこれらの「知的状況が一七〇〇年前後に存在し、それが十七世紀を通じて成熟してきたことは、それを身分制的な文化構造の解体過程とみるのではなく、近世社会の成立そのものとして捉えるべき」と評価した⁽⁵⁾。

一方、土佐を事例に、元禄・享保期の書籍の流通や受容を分析したものに小林准士氏の研究⁽⁶⁾がある。小林氏によれば、地方でも日常的に書物購入がなされ地域内での書物の相互貸借や共同の学習がされていたが、京都の書肆から書物を購入する際は儒者である谷秦山が取次ぐなど、地方では安定して書籍を供給できる書肆がいなかつ

た⁽⁷⁾ すなわち「地方の場合には、書籍に関して専門的な知識を有するものが流通を円滑にする役割も果たさなくてはいけない状況があった」⁽⁸⁾ という。読書をした人々の社会階層も、谷秦山とつながりを持ち得る人々、「高知城下を中心に土佐内に点在していた武士、郷侍、浪人、医者ら」であり、横田氏の指摘したような村落の上層農民や庄屋層はいなかったことを指摘している⁽⁹⁾。

近世後期の蔵書についての研究には、小林文雄氏の蔵書を持つ家と地域社会の関係についての研究⁽¹⁰⁾がある。近世後期になると上層農民の蔵書が村落内の小前層などにも貸し出されることに注目し、「蔵書の家」という社会的機能として位置づけを行った⁽¹¹⁾。小林文雄氏の研究からは近世後期には蔵書を持つ人々だけでなく、小前層などの広範な階層が書物を読んでいた⁽¹²⁾ことがわかる。

土佐における蔵書目録の研究には、川澤桂子氏が土佐藩家老である五藤家の蔵書目録史料について紹介したものの⁽¹³⁾、遠藤隆俊氏の高知県に所在する漢籍についての調査研究⁽¹⁴⁾があるものの、未だ緒についたばかりである。

本稿では、土佐国高岡郡宇佐浦の真覚寺住職静照が作成した蔵書目録である『朝陽山文庫書籍目録』（真覚寺蔵）

について紹介しその内容を考察したい。あわせて静照が記した『真覚寺日記』⁽¹⁵⁾と、書籍の抜き書きである『旭溪隨筆』（真覚寺蔵）などの史料から、近世後期の土佐における書物の受容や読書について明らかにすることを目的とする。

第一章 『朝陽山文庫書籍目録』について

第一節 宇佐浦真覚寺住職静照について

宇佐浦（現、土佐市宇佐町）は、高知県のほぼ中央部、仁淀川の下流西側に位置する。天保十二（一八四一）年には、家数五五七軒・人口二、九九八人であった。この時期、大坂、九州、瀬戸内海海域で廻船活動が活発で、小型廻船（土佐では市艇と称する）による廻船業が隆盛を迎え、宇佐浦も廻船業で賑わった。鯉漁や鯉節生産が盛んにおこなわれ、大坂の市場へと鯉節を移出しており、幕末期も人口が増加していたという⁽¹⁶⁾。

真覚寺は、この宇佐浦橋田にある浄土真宗東本願寺派の寺院である。本稿の主人公である真覚寺八代井上静照

(一八六一―一八六九)が嘉永五(一八五二)年に執筆した『真覚寺諸事記録』⁽¹⁷⁾に、真覚寺の来歴が書かれているので引用しておこう。

一、当寺ハ元来当国安喜浦ニ有之候禅宗之庵也、然処、万治年中二三河国長瀬ノ郷ノ人井上三郎友光入道源了当国へ参ル時、右之禅庵を改真宗之道場となし妻帯致シ居候事、委細別記ニ有

(中略)

一、二代正源宝永七寅ノ秋安喜浦より宇佐浦橋田へ引越来ルノ節、檀中となるもの式拾四軒有之、只今八五十六七軒二倍增致し居ル

(中略)

一、源了より正宅之時迄ハ寺号なし、六代正宅ノ時、京都御本殿より寺号を真覚寺ト御免有之、其時之御免書別ニ納メ有之

(中略)

一、初代源了より五代正宅之時迄ハ西派ノ道場ニ而有之候処、六代正宅之時正念寺之末寺ニ相成候ト見ゆ、八代静照、正念寺と意底違之義有之、天保十一子年秋より弘化三年迄七ヶ年之間及確執、

当国一派法中連判之上京都へ達しニ相成筈之処、午年漸内治ニ相成、京都御本殿御直末寺ニ被仰附候、国許役所向も聞済ニ相成候、右引合之義ハ如別紙

静照によれば、真覚寺は元来は土佐国安喜浦にあった禅宗の庵であつた。万治年間(一六五八―一六六一)に三河国長瀬郷の人、井上三郎友光が出家し源了と名乗り、この禅庵に住みつき真宗道場に改めた。二代正源が宝永七(一七一〇)年の秋に安喜浦から宇佐浦へ道場を移転した。当時、檀家は二四軒であつた(ちなみに「只今」すなわち自分の代には倍增して五十六、七軒)。源了から五代正宅までは西本願寺派の道場であり、寺号はなかつた。六代正宅のとき、京都の西本願寺より真覚寺の寺号を名乗ることを許された。また、この頃、土佐国宇佐の正念寺末寺となつたと思われる、静照は述べる。

右の史料では、続いて、自らの代に正念寺との間で天保十一(一八四〇)年から弘化三(一八四六)年まで七年にも及ぶ確執があり、その末に京都の本山の直末になつたと記す。しかしながら、後述するように静照が真覚寺住職となるのは弘化四年であり、厳密に言えば、父で

ある七代正晴の代ということになる。さらに言えば、この史料には、重大な書き落としがある。すなわち、六代正宅の代、真覚寺は東本願寺に転派したのであるが、それが記載されていない。静照が嘉永六（一八五三）年に書いた『朝陽山高照院真覚寺傳記』⁽¹⁸⁾には、その経緯が記されているので、引用しておこう。

此代（六代正宅―筆者注）迄西派ニテアリシ処文化二丑年国内ニテ七ヶ寺申合セ東御本山へ歸參シ東派トナル其故ハ正念寺ハ古来ヨリ西派ニテ泉州堺善教寺ノ末寺ナリ当寺六代正宅ノ時正念寺ノ住職ハ凌雲トイフ其節西派ノ御使僧当国へ下タリ諸寺巡在ノ序ヲ以テ正念寺へ来ルニ穢^{ママ}多數人御使僧ノ駕籠ヲ舁キ其御使僧ヨリ寺々へノ用事ノ使モ皆穢^{ママ}多ナル故法中一同忌々シキ更ナリトテ歸參ノ内談ニ及ヒシモノナリ其時戸原光明寺モ正念寺ノ末寺ニテアリシカトモ中々心中宣シカラヌ者故今度ノ仲間ニ入ナハ却テ大望ノ妨トナランモシレス捨置ンニハシカストテ光明寺へハ沙汰セス正念寺ヨリ正宅へハ内談アリ其義尤然ルヘシト承知セシカハ去ラハ早く更ヲ始ント同意ノ人々ト示シ合セ圓満寺へ内々掛合ヒ京都へノ伺

ニナル其七ヶ寺トイフハ長法寺正念寺正宝寺高願寺教泉寺正覚寺当寺ナリ其更洩レ聞ヘケルヨリ真宗寺長泉寺ナトイフ者引戻サント役場へ達シ出テ更六ヶ敷ナリケレトモ永福寺千蓮寺佛性寺圓満寺等ノ世話ニテ終ニ歸參シ東派トナル

ここで書かれていることが本当に転派の理由であったのかわからないが、文化二（一八〇五）年に、正念寺とその末寺（真覚寺もその一つ）六ヶ寺が東本願寺派へ移籍している。その後、前述のように正念寺との確執を経て、真覚寺は弘化三年には東本願寺の直末の地位を獲得している。檀家数五十六、七軒の小寺であるが、静照が世話をして三間半四方の本堂を再建し、同時に庫裏も再建する等、寺務を活発におこない、文久元（一八六一）年五月、四十六歳の時には本山から「飛檐」の格式を与えられた。⁽¹⁹⁾

次に静照の略歴を見ておこう。静照は文化十三（一八一六）年宇佐浦橋田の真覚寺七代井上正晴の長子として生まれた。⁽²⁰⁾ 弘化四（一八四七）年三十二歳で父を継いで真覚寺住職となつている。⁽²¹⁾ 前掲の『真覚寺諸事記録』には、静照が自らの学問修得の過程について述べた一節が

あるので、引用する。

一、当寺古より書物一卷も無之、静照十八歳之時、為修学阿波国へ趣キ、其翌年又阿波徳島へ行、其翌末年二十歳之時上京之序を以北国へ趣キ、越後二暫く滞留致し、帰路播州へ寄り赤穂郡与井村西乗寺二寓居し、翌年春帰国し、廿三才二而又上京、其序を以又播州二逗留、五月二帰国、同年九月又播州へ行、翌年廿四才二而帰国、廿七歳之時又々上京、仏具類過半此時出来、廿五才之時より正念寺ト争論之義発り七年を過候而、弘化三年年静照三拾壹歳二而兄弟共上洛御本殿御直末二相成ル、右之通十八才より以来少々宛求得候書物及諸国において写取候本等二候へハ跡庵末二不相成趣手入可致候（傍線筆者）

ここで興味深いのは、静照が当寺に書物が一卷もなかったと述べていることである。静照は天保四（一八三三）年十八歳の時に修学の為に阿波へ行き、翌年も阿波に赴いている。二十歳の時には上洛し、さらに北国へ旅をし、越後に暫く滞留した。帰途は播磨国赤穂郡与井村の西乗寺に寓居した。天保十年の春に帰国し、静照二三歳の時

に再び上京しているが、その際にも又播州に滞在し、五月に帰国した。同年九月に再び西乗寺へ行き、翌年二四歳で帰国するまで同地で修行している。二七歳の時には又上京している。その折に真覚寺の仏具類の大半を整えたという。真覚寺の蔵書は、自分が十八歳の時から少しずつ入手し、また諸国で書写してきた書物であるから、大事にするようにと述べているのである。

第二節 蔵書の形成と目録の作成

本節では『朝陽山文庫書籍目録』の形成と目録の作成について分析を行う。同目録は、静照により、嘉永七（一八五四）年五月に一度作成された（当初部分）。その後静照が入手した板本・写本を増補加筆している（増補部分）。同目録は「板本部」、「写本之部」から成る。写本の部には静照の自作の書物と真覚寺関係文書が含まれている。

同目録には、当初部分には板本七一部二十四巻と写本八〇部一一巻を記載する。増補部分には以降も板本二九部一二三巻（ほかに折本二冊と地図一）と写本二七部四一巻を記載し、計二〇七部、四八九巻（ほかに折本二

冊と地図一）を記載している。この目録に掲載されている書物の情報等を年毎に整理して表にしたのが、本稿末尾に載せた表一『朝陽山文庫書籍目録』にみる年代別書籍の入手」である。「巻数」と「入手場所」の欄は、目録記載のものをそのまま記した。「分類」欄は、『国書総目録』の分類に従い筆者が記載したものである。備考欄には、入手経緯に関する情報を特記した。あわせて「四書、道春点、十巻、文政六未夏求之、所望有之譲ル今ハナシ」⁽²²⁾とか「古本、唐詩選、合本一卷、天保元寅年求之、贈与極楽寺小僧」⁽²³⁾というように、目録作成後、他人に譲ったものについては目録に朱書きで加えている（備考欄に○を付けた書籍、全部で十二部）ので、それを記した。

なお、静照の『真覺寺日記』には、静照が大坂や城下の書林から書籍を購入している様子がみられるが、実際には購入した書籍でも、蔵書目録に記載されていないものがある。⁽²⁴⁾その理由はわからないが、すべての書籍が蔵書目録に記載されたわけではないようである。

ところで、なぜ静照は蔵書目録を作成したのか。静照にとって蔵書目録の作成にはどのような意味があったのか。

横田冬彦氏によれば、享保期になると、「蔵書目録」という文書が現われる。⁽²⁵⁾京都から始まった出版業が三都へと広がり、出版部数も急増するようになった十七世紀後半く十八世紀初めにかけて収集された書籍が、享保期には一定の量に達して整理や分類、目録化を必要としたからだと、その理由を述べている。⁽²⁶⁾また蔵書も家産として受け継がれるものであったとも指摘している。⁽²⁷⁾

『朝陽山文庫書籍目録』が作成されたのは、嘉永七年五月、静照が三十九歳の時である。前述の『真覺寺諸事記録』によれば、静照は十八歳の頃から書籍を収集していた。静照が書籍を収集し始めてから約二十年経過しており、蓄積された書物が一定の量に達したために整理・分類・目録にする必要が出てきたと推測される。また、父正晴が嘉永六（一八五三）年の五月十五日に六十六歳で亡くなっている⁽²⁸⁾。父の死から約一年という時期に書籍目録が完成したことは、父正晴の死も一つのきっかけになっているかも知れない。加えて言えば、静照には跡継ぎとする子がおらず、静照自身も持病により、常に死を意識していた。自身がしてきたように書籍を収集し、本を読み、宗学を熱心に学ぶことの必要性を、真覺寺を嗣

ぐ者に示そうと、蔵書目録の題名を「真覚寺文庫書籍目録」と名づけ、「跡庵末二不相成趣入手可致候」と指示したとも考えられる。

静照の蔵書はどのように形成されたのだろうか。表一を見ると、『朝陽山文庫書籍目録』記載の全二〇七部のうち二〇五部に入手時期が書かれている。文政六（一八二三）年から慶應三（一八六七）年までの四十五年かけて形成されたことがわかる。入手時期を五年ごとに分け、静照の年齢や、主な出来事等についてまとめたのが、表二である。

文政六年、同八年に入手された書籍は、静照が八歳、十歳の時に相当する。『真覚寺諸事記録』には「当寺古より書物一卷も無之」とあり、真覚寺には書籍はなかったとされているが、静照が書籍を購入できるとは考えられず、同史料の記述は書物が少ないことを静照が誇張して書いたものとも考えられる。静照が八歳、十歳の時に入手したと書かれている書籍は静照の父の正晴が入手したものである可能性があるが、不明である。

表二（次頁）から、次に五年ごとの書籍入手部数の推移をみると、最も多いのは天保四（一八三三）

年（天保八（一八三七）年の四一部であり、静照が一八〇二歳の時である。表一によれば、天保四年に阿州で入手した本が七部みられる。以降も、天保五年に阿州で入手した本が三部、天保六年に京都で入手した本が二部、播州で入手した本が四部ある。天保九年にも播州で三部本を入手しており、静照は（自らの経歴で述べていたように）修学等で赴いた各地で書籍を入手していた。

次いで嘉永六（一八五三）年（安政四（一八五七）年は三八部の書籍を入手、天保十四（一八四三）年（弘化四（一八四七）年は二八部、安政五（一八五八）年（文久二（一八六二）年は二六部、弘化五（一八四八）年（嘉永五（一八五二）年は二四部の書籍を入手している。また、文政六（一八二三）年（文政十（一八二七）年は一五部を入手している。文政十一（一八二八）年（天保三（一八三二）年の四部、静照が一三〇一七歳の時と、文久三（一八六三）年（慶應三（一八六七）年の二部、静照が四八〇五二歳の時は入手数が少ないことがわかる。当時書物は決して安いものではなく、短期間に大量入手できるものではなかった。³⁰⁾ 静照は毎年数部ずつ書物を収

表二：五年ごとの入手時期の推移

区分	区分した時期 の合計部数	本を入手した年	入手した 本の部数	静照の年齢	静照の活動
文政6(1823)年 ～文政10(1827) 年	15	文政6年	13	8	不明
		文政8年	2	10	不明
文政11(1828)年 ～天保3(1832)	4	文政13年	1	15	不明
		天保元年	2	15	不明
		天保3年	1	17	不明
天保4(1833)年 ～天保8(1837)	41	天保4年	8	18	阿波へ修行に行く
		天保5年	8	19	阿波へ修行に行く
		天保6年	15	20	上京する。北国へ行き、越前から越後、信濃など真宗ゆかりの各地を巡る。帰路は播州へ寄って赤穂郡与井村西城寺恵海老師のもとで学ぶ。
		天保7年	1	21	播州に滞在。春に播州から帰国。
		天保8年	9	22	上京する。播州に逗留し、5月に帰国。9月に再び播州に行く。
天保9(1838)年 ～天保13(1842)	23	天保9年	13	23	播州から帰国。
		天保10年	3	24	不明
		天保11年	4	25	不明
		天保12年	1	26	上京する。
		天保13年	2	27	不明
天保14(1843)年 ～弘化4(1847)	28	天保14年	9	28	古物店で板本入手。
		天保15年	2	29	不明
		弘化2年	4	30	大坂で板本を入手。
		弘化3年	8	31	京都で板本を入手。
		弘化4年	5	32	真覚寺住職となる。
弘化5(1848)年 ～嘉永5(1852)	24	弘化5年	1	33	不明
		嘉永2年	5	34	不明
		嘉永3年	6	35	姫路で板本を入手。
		嘉永4年	4	36	不明
		嘉永5年	8	37	10月より千蓮寺での法座を開始。
嘉永6(1853)年 ～安政4(1857)	38	嘉永6年	16	38	上京
		嘉永7年	6	39	上京する。
		安政元年	1	39	不明
		安政2年	6	40	不明
		安政3年	5	41	不明
		安政4年	4	42	不明
安政5(1858)年 ～文久2(1862)	26	安政6年	10	44	妻の佐保と共に上京。4月19日に出発し、5月28日に帰寺。
		万延元年	5	45	不明
		万延2年	6	46	飛檐出仕のために上京。5月6日出発～6月3日帰寺。
		文久元年	1	46	上京する。
		文久2年	4	47	不明
文久3(1863)年 ～慶應3(1867)	2	慶應2年	1	51	不明
		慶應3年	1	52	不明

注1:『朝陽山文庫書籍目録』より作成

注2:静照の活動については『朝陽山文庫書籍目録』、『真覚寺諸事記録』、『真覚寺日記』、『高知県人名事典 新版』(1999年、高知新聞社。)より作成

集し（ただし書物を全く入手していない年も存在する）、蔵書を形成したと考えられる。

入所場所については、「高府」（高知城下）、「大坂」、「京都」、「播州」、「阿州」で書籍を入手したことがわかる。大坂から入手したものが十三部、阿州（阿波国）で入手した書籍が一〇部、播州から入手したものが九部（その内姫路が一部）、京都から入手した書籍が七部（その内三部が「御本山御免」とあり京都本山へ行つた際に入手、「就飛檐出仕御免」の際に入手したものが一部ある）、高府（高知城下）で入手した書籍が三部（内一部は城下水通町で入手）ある。おそらくこれらの板本の多くは上方や高知城下の書林等で購入されたと考えられる。また、興味深いことに、「円機活法五、一卷、天保十四卯八月於古物店求之」⁽³¹⁾等と、「古物店」でも書籍を六部購入しており、古物を扱う店でも書籍を入手していた。

一方、阿州と播州で入手した書籍については写本がほとんどであり、前述したように静照は阿波や播州での修行の際に書籍を閲覧し、修行先で書籍を写し写本を作成していたと考えられる。一冊のみだが、「二十四輩御旧跡圖、折本、安政二卯年慈勲從関東持帰」⁽³²⁾とあり、静照の

弟の慈勲が関東で入手してきた書籍も蔵書目録に含まれている。他にも、「地球圖、折本一卷、嘉永三戊夏從藻洲潟横田氏到來」という記述があり、藻洲潟（現、高知市長浜）の横田という人物から『地球圖』を入手したことが判明する。その他には知人・友人などから本を借りて写本を作成したものもある（表一参照）。例えば、「高野大師行狀編、一卷、從福智院借得而写、弘化三午春写」⁽³³⁾とあり、『高野大師行狀編』を宇佐浦福智院（真言宗）から借りて写本を作成していた。

以上、蔵書の形成と目録の作成について検討してきた。『朝陽山文庫書籍目録』に記載されている蔵書は静照が十八歳の時から集めてきた書籍がほとんどであり、実態は静照個人の集めた蔵書である。跡継ぎとする子がおらず、静照自身も持病により、常に死を意識していた静照が、後を継ぎ真覺寺の住職となる者に対して、自分の蔵書の形成過程を示すことにより、学ぶべきことを指示しようと蔵書目録を作成したと推定した。

書籍の入手については、その購入部数には年によってバラツキがみられるが、静照は十八歳から毎年のように書籍を入手した。特に静照が一八〜二二歳の時に最も多

く書籍を入手しており、青年期の各地での修行が静照の蔵書の形成に大きく寄与していたと思われる。

第三節 蔵書の構成と内容

(一) 蔵書の構成

『朝陽山文庫書籍目録』に記載されている蔵書はどのような構成になっているのか。前述のとおり、同目録は「板本部」、「写本之部」に分かれている。「板本部」には嘉永七年五月までに入手した書物について記載されているが、嘉永七年六月以降も追加して記載されている。「写本之部」には嘉永七年六月以降のものも同様に記載されているが、「写本之部」に「外」として記載され、収められている。「外」としたのは自作の書物を別途写本として嘉永七年五月以降に装丁したので、「外」としたものであろう。これらのことから静照は厳密には「板本」、「写本」、「外」の三つに分け、自らの蔵書を分類していたと考えられる。

「板本部」、「写本之部」に記載されているもので特徴

のある書籍をいくつか挙げる。

写本の中には「拔萃」、「拔書」と書かれた書籍が一〇部含まれており⁽³⁴⁾、書籍の一部を抜き書きしたものも写本として蔵書に加えられていた。また、複数の書籍名が書かれたり、「合一巻」という表記がされた書籍が四部ある。一例を挙げれば、「本朝語園空華談叢谷響續集 板書 一卷 同(天保―筆者注)十四卯夏写」とある。これは、『本朝語園』という弧山居士が書いた随筆、『空華談叢』という妙竜の著書で真言宗の書籍、江戸時代前期の真言宗僧侶の運敵が書いた仏教・随筆の本である『寂照堂谷響続集』という書籍からなっている⁽³⁵⁾。静照は仏教書・随筆といった複数の書籍を書写して一つの写本としていたのである。

また、静照は「写本之部」に真覚寺に関する書籍を二部記載している。同目録には「真覚寺世代須知、一卷、同(嘉永―筆者注)六癸丑春改写」⁽³⁶⁾や「當山佛具類寄附録、一卷、弘化四未正月改写」⁽³⁷⁾とある。「改写」とあるので、元々あった真覚寺に関する文書を静照が写し直したものと考えられる。加えて、静照自作の書物が一三部みられる(表一参照)。例えば、『地震日記』は安政の大

地震を記録し後世へ残す為に書かれたものである⁽³⁸⁾。『渡海之船筏』は『真覺寺日記』慶應三年六月七日条に「我家二殘し留ん為二當流安心の一義自問自答して書記し先月廿八日綴り終り昨日表紙をかけ今日朱圈を加へ終る名けて渡海の船筏とす」とあり、「我家に残し留ん為」に記した書物である。他にも『旭溪隨筆』、『旭谿書捨』という静照自作の書物が藏書目録に記載されている⁽³⁹⁾。『旭溪隨筆』は静照が書籍を抜き書きして作成した書物である。

『旭谿書捨』については『朝陽山文庫書籍目録』に「嘉永七寅六月予病中草稿、贈城下同行之写」とあり、城下の同行（真宗門徒）へ贈った書物の写しであったことしかわからない。『旭溪隨筆』や『旭谿書捨』の書名にもなっている「旭溪」とはおそらく静照の雅号だと思われる、静照が個人的に記した書物であると推測される。また、静照は自作の草紙を城下の知人（真宗門徒）へと贈った⁽⁴⁰⁾りしている。知人や友人に贈ったと考えられる自作の草紙で書籍目録に記載されているものは『旭谿書捨』、『迷悟指南車』⁽⁴¹⁾などがみられるが、城下門徒に頼まれて記した『神國ノ心得』や『長久の礎』は藏書目録に記載されていない。なぜ自作の書物であっても藏書目録に記載さ

れるものとそうでないものが存在するのか。静照が知人・友人に贈った自作の書物は書名から推測するに、門徒に対する教化や日常での心得等を記した説法書のようなものだろう。

藏書目録に記載されている静照自作の書物は『地震日記』や『渡海之船筏』等の後世に残す目的で記されたものの、『旭溪隨筆』、『排佛語纂』や『雜書拔書』といった静照個人が趣味で記した書物が多く、静照が後世に残す意図で作成したものや、静照が自分自身の為に記した書物が主に目録へ入れられていると考えられる。

以上、藏書の構成についてみてきたが、静照の藏書は板本と写本（書籍の一部抜き書きや抜萃でできた写本、複数の書籍を静照自身がまとめて一つの写本にしたものも含まれる）、静照自作の書物と真覺寺関係の書籍で構成されていた。

（二）藏書の内容

次に藏書の内容について分析をおこなう。『朝陽山文庫書籍目録』に記載されている書籍の分野などに特徴は

表三：『朝陽山文庫書籍目録』分野別表

ジャンル	部数		
仏教、寺院	86	仏教寺院	85
漢詩、詩学等	16	漢詩詩学詩歌集	14
娯楽	10	黄表紙咄本仮名草紙絵画双六伝記歌謡	1
地誌・地図	7	地図地誌	1
和歌、歌学等	6	和歌和歌・注釈歌集歌学	1
辞書・事典	3	辞書百科事典	2
漢学	5		1
儒学書	4		
軍記・実録	3		
年表	4		
天文・暦・占ト	3		
往来物	3		
神道	2		
歴史書	2		
漂流記	2		
兵法	2		
語学	2		
真覚寺関係書物	2		
法制・注釈	1		
書目	1		
名鑑	1		
家事	1		
災異	1		
風俗	1		
思想	1		
随筆	1		
漢籍	1		
随筆、仏教	1		
自作	13		
不明	22		
合計部数	207		

注：『朝陽山文庫書籍目録』より作成。

あるのか。分野ごとに整理したのが、表三である。

まず、仏教書が八六部と多い。真宗の一僧侶の蔵書なので仏教書が多いことは当然であろうか。仏教書の中でも真宗の書籍が一九部みられる。しかし真宗の書籍のみでなく、浄土宗（四部）、天台宗（一部）、日蓮宗（一部）、臨済宗（一部）、曹洞宗（一部）、真言宗（二部）など他宗派の書籍も所有しており、仏教全般への関心を窺える。前述のとおり、静照は十八歳の時から各地へ修行に赴き、宗学を学び、書籍の収集をしていた。僧侶という職業上のための仏教書が多いということもあるが、やはり静照の学びの熱心さから仏教書が多いと考えられる。また『真覚寺日記』には「二十二日晴大風今朝純肇伊与国宇和嶋

り例の永代経法會を勤る、両幅の繪相の内地獄の分八去年分講説相済たるゆへ、當年ハ往生要集を讃題として餓鬼道已下を演説ニ及ふ、参詣式拾四五人有⁽⁴³⁾という記述があり、静照は法談の讃題として「大坂建立ノ御文」や「往生要集」を用いていた。同目録にも『大坂建立御文録』と『往生要集』があり、⁽⁴⁴⁾静照は蔵書にある仏教書を法談の讃題として用いていたと考えられる。

同目録には『四書』、『大学中庸』、『小学』、『唐詩選』、『袖珍三体詩』などの儒書・史書等の漢籍類や漢詩集等の書籍、往来物である『小野篁歌字盡』、『雅俗要文』が記載されている。これらの書籍のうち『唐詩選』や往来物は近世の寺子屋の教科書として使用されていた書物で

へ行、夜詣人拾人余有、風やます讃題ハ大坂建立ノ御文也⁽⁴²⁾や「十一日晴大二暖也、山へ御花をきり二行、本堂へ上ケ荘厳相済む、今晚よ

ある。⁽⁴⁵⁾『四書』、『大学中庸』、『小学』は私塾の教科書として使用されていた。静照は真覚寺住職を勤めながら寺子屋も営んでいた⁽⁴⁶⁾ので、『唐詩選』や往来物は寺子屋で使用していたと考えられる。近世では『四書』や『大学中庸』、『小学』等の書籍は教養や学問の入門書としても用いられており、そのような用途でも用いられていたと推測される。他にも寺子屋で使用されたと考えられるものに『石摺千字文』がある。⁽⁴⁷⁾加えて、『四書』とその辞書である『四書字引』、『文選正文』とともに辞書である『文選字引』を所有しており、静照が『四書』『文選正文』を読む際に辞書を使用しながら読んでいたことがわかる。

注目されるのは静照が『清詩選』といった漢詩、『古今集遠鏡』、『續三玉和哥集』などの和歌、『古調梯』や『歌枕秋寢覚』などの歌学の本を多く所有していたことである。蔵書目録には漢詩文等の書籍が十六部、和歌関係の書籍が六部記載されている。静照の記した『真覚寺日記』には友人や知人に歌を贈った記述や⁽⁴⁸⁾生活やふとした日常の折などに歌を詠む記述⁽⁴⁹⁾が見られ、これらの興味関心から書籍を収集していたと考えられる。仏教書以外の分

野にも興味を持つ静照の関心の広さが見られる。

ところで、書籍目録の中には『称航堂蔵板目録』という名の書籍がある。称航堂とは柏原屋清右衛門という大坂の板元である。⁽⁵⁰⁾『国書総目録』にはこの書籍名は記載されていないが、書名から推測するに『称航堂蔵板目録』は大坂の板元である称航堂が出版した書籍目録であると考えられる。静照は『称航堂蔵版目録』を参考にして購入する書物を決めていたと推測できる。書籍の収集が静照の関心や興味によつて選択されていたことがわかる。加えて、書籍収集に対する静照の主體的、積極的な姿勢が見受けられる。

『朝陽山文庫書籍目録』『写本』の中には「教行信証総序、教巻、聴記、一卷、天保六未秋聞記」⁽⁵¹⁾や「大經講演、一卷、天保五午春於阿州聴記」⁽⁵²⁾のように「聴記」や「聞記」と記された写本がある。これらの書籍はおそらく静照が修行先等で法話や講演を聞き、それを記録した講義ノートのような書物だと考えられる。既にある書物を写すだけでなく、静照の学習の姿勢や講義ノートの性質を持った書物が蔵書目録に含まれていた。

静照の蔵書は仏教書の他にも、儒学書・史書等の漢籍

類、和歌・漢詩文などの書籍も多く所有していた。それ以外にも軍記物や兵法書、百科事典・年表・地図・曆・家事、仮名草紙など、蔵書の分野は多岐に渡り、静照の興味関心の幅広さを窺える。静照の所蔵する仏教書には真宗の書籍が多くみられたが、浄土宗、日蓮宗、真言宗、臨済宗など他の宗派に関する書籍も存在しており、自身の属する宗派だけでなく仏教全般への興味関心があったことが窺える。そして京都の本山や修行先で聞いた法談や演説を写本にし、講義ノートのようなものを作っており、宗学に対しての熱心が窺える。

第二章 書籍の入手と貸借関係について

第一節 書籍の入手について

本節では、『朝陽山文庫書籍目録』の形成にも関わる書籍の入手の一事例を紹介する。静照の書籍の入手を分析し、幕末の土佐藩における書籍の入手について明らかにする。前述のとおり、静照は高知や大坂、京都、姫路などから板本を入手していることがわかる（表一参照）。

高知城下ではいつ頃から書林が存在したのか。前述のとおり、元禄・享保期の土佐には書籍を安定して供給できる書林がいなかった⁽⁵³⁾。鈴木俊幸氏は「高知の瀬戸屋才助は高知ではもともと古い本屋であったようで、寛政四年（一七九二）版『南海道名所志』の刊記に名前を確認でき、秋田屋太右衛門版の売弘書肆として嘉永期まで営業を確認できる⁽⁵⁴⁾」と指摘している。さらに、寛政四年前後の高知城下町人町の町並みを復元した高松恵氏の研究⁽⁵⁵⁾によつて、下町に本屋が一軒あったことを確認できる⁽⁵⁶⁾。また引野亨輔氏は倉敷の書肆の太田屋の研究⁽⁵⁷⁾において、秋田屋太右衛門が出版した往来物である『浪華百人一首忘貝』や『増女百人一首合鐘』、『桂百人一首玉免』の刊記にも倉敷書肆の太田屋や他の地方書肆と共に売弘書肆として瀬戸屋才助の名がみられることを確認できるとする⁽⁵⁸⁾。なお、寛政期と天保期の瀬戸屋才助は同一人物ではなく、世襲により受け継がれたものだと考えられる。

『真覚寺日記』には高知城下の書林について、例えば次のような記述がみられる。

四ツ頃列仙傳神仙傳を調ん爲書林改田屋へ行、紅粉屋へ寄り葉種を調へ、横町へ寄ル、嶋崎清七来る深

草元政熊沢了介と交りし漸々と致し時を移ス

(元治二年一月二十日条)

半晴、下町書林へ行、万国圖を求帰る

(慶應元年十一月二十日条)

静照は城下「下町書林」や「書林改田屋」で直接書籍を購入しており、幕末の高知城下の下町に書林が存在し、下町の書林と同一であるかは不明だが、「書林改田屋」があったことが確認できる。また、『真覚寺日記』には、大坂や京都等の書林についても次のような記述がある。

今日大坂へ注文せし郭註莊子十卷、五雜俎八卷、老子二冊、茶店問答三冊、一休狂歌問答等来る。

(安政六年三月二十二日条)

今度京都より到来の太子傳圖會全部六巻を始めて見る

(文久二年十一月二十日条)

静照は大坂・京都の書林からも本を入手していた。「注文」した本が到来したという記述から、静照はなんらかの方法で大坂の書林へ注文し、入手していたようである。

静照はどのような方法で大坂や京都の書林へ注文し、本を購入していたのか。『真覚寺日記』万延元(一八六〇)年四月二十九日条には「先日上町大徳屋次男上京ノ節頼

置し書物と漢年契新撰年表古詩韻範今日到来。」とあり、静照は知り合いや友人が上京する際に書物の購入を頼んでいた。

さらに『真覚寺日記』には次のような記述がみられる。

五ツ頃長三郎大坂へ出帆とて来る練薬火口筆附木の類注文する今夜聞小々暑し星明也

(慶應三年六月二十三日条)

右の史料から静照は大坂へ出帆する長三郎に「練薬火口筆附木の類」を注文したことがわかる。長三郎はおそらく市艇の船頭または水主だと考えられる。前述のとおり、幕末の宇佐浦では市艇による廻船業も盛んに行われた。静照は廻船が大坂等へ行くついでに大坂や京都の書林へ書籍を注文していたのではないか。⁽⁵⁹⁾ 前述したが、静照は各地に修行へ行った時、本山へ登るために上京した際などに書物を購入しており、大坂や京都の書林での直接購入もしていた。⁽⁶⁰⁾

前述のとおり、静照は播州・阿州等での修行の際に写本を作成したり、知人・友人などから本を借りて写本を作成し、写本での書籍収集をおこなった。写本以外にも静照は書籍を抜き書きした『旭溪随筆』という本を作成

表五：『旭溪随筆』に抜き書きされた書籍の分野別表

ジャンル	部数	内訳
仏教書	27	内訳（儒学書2部、事典1部、地理書1部、雑史1部、不明6部）
漢詩文	8	
漢籍	11	内訳（雑史3部、史論2部、外国史1部）
歴史書	6	
伝記	4	
謡曲	3	
地誌	2	
辞書	2	
本草	1	
和歌	1	
神道	1	
随筆	1	
兵法	1	
漢学	1	
不明	12	
合計	81	

注：『旭溪随筆』より作成。

している。⁽⁶¹⁾『旭溪随筆』は全十四冊からなるが、二巻と六巻は現存しない。表紙に巻数、抜き書きした書籍名、書き始めと書き終わりの年月が記されている。表紙に書かれている書籍の分類と記載されている巻数、それぞれの巻の書き始めと書き終わりの年月については、本稿末尾の表四を参照されたい。

『旭溪随筆』に抜き書きされた書籍の中には複数回抜

き書きをしている書籍がある。⁽⁶²⁾『旭溪随筆』の存在は、静照が蔵書目録にある写本だけでなく、抜き書きでの書籍の収集を行っていたことを示す。⁽⁶³⁾

『旭溪随筆』に抜き書きされた書物の分野に特徴はあるのか。『旭溪随筆』に抜き書きされた書物は全部で八一部であるが、それを分野別に整理したのが、表五である。⁽⁶⁴⁾

最も多いのは、『朝陽山文庫書籍目録』と同じく、仏教書であり、二七部ある。静照が僧侶であったこと、宗学に熱心であったことから仏教書が多いと考えられる。次いで漢籍が一部、漢詩文が八部、歴史書が六部、伝記が四部、謡曲が三部、辞書が二部、地誌が二部、本草、和歌、神道、随筆、兵法、漢学が一部ずつ、分野が不明なもの一二部で構成されている。仏教や漢詩文、漢籍や歴史書が多いが、他にも和歌、神道、随筆、兵法、漢学等の様々な分野の書籍を抜き書きしていたことが判明する。静照がこれらの分野の書籍に興味・関心を持っていたことが窺える。

蔵書目録に記載されている書籍と異なる点として、蔵書目録にあった仮名草紙、咄本、黄表紙、軍書等の読み物類が『旭溪随筆』には見られず、伝記が四部抜き書き

されているのみである。庶民の娯楽として楽しまれてきた書籍ではなく、仏教書、漢籍、漢詩文、歴史等の書籍を中心に抜き書きされたことが分かる。

『旭溪随筆』に抜き書きされた書物は、どこで読んだものを抜き書きしたのか。静照は安政五（一八五八）年四月二十九日に高知城下周辺の土佐郡潮江村の浄土宗知恩院末の称名寺から『西域記』という漢籍の地理書を借りている。⁽⁶⁵⁾ 安政四年秋、安政五年冬に作成した『旭溪随筆』其五には『西域記』の抜き書きがあり（表四参照）、静照は称名寺から借用した『西域記』を『旭溪随筆』に抜き書きしていたと考えられる。さらに静照は土佐藩藩士である松下与膳のもとを訪れた際に松下の蔵書である『鉄研余滴』を読んでいる。⁽⁶⁶⁾ 『旭溪随筆』其五にも『鉄研余滴』の抜き書きがされている（表四参照）。『旭溪随筆』は静照が友人・知人などから書籍を借りたり、友人・知人の家を訪れた際にその家の蔵書を読み、抜き書きをすることで作成されたと言えるであろう。

以上、静照は京都・大坂へ赴いた際に直接購入したり、友人や知人の上京の際に書籍の購入を頼むことで書籍を入手した。また、静照は大坂や京都への用事を廻船の水

主や船頭へ頼んでおり、書籍も同じように大坂や京都へ行く水主や船頭へ頼んでいたと考えられる。静照は高知城下の書林からも書籍を入手しており、幕末の高知城下では書物の直接購入が可能であった。さらに静照は板本での書籍の収集だけでなく、友人や知人から書籍を借りて写本を作ったり、抜き書きを作成して、書籍を収集した。横田氏は「出版本として入手しえない知識・情報は、手写本で流通したのである」⁽⁶⁷⁾と指摘している。『朝陽山文庫書籍目録』の板本と写本の内訳は、板本が一〇〇部、写本が一〇七部となっている。この写本の部数には静照自作の書籍一三部も含まれているので、実際の写本の部数とは異なるが、それでも板本と同じくらいの量の写本を所有していることが分かる。また、『旭溪随筆』には多くの書籍を抜き書きしており、写本や抜き書きでの書籍の収集も静照にとって重要であったと考えられ、静照の書籍収集や学びに対する積極的な姿勢を見受けることができる。

第二節 貸借関係について

本節では『朝陽山文庫書籍目録』の形成にも関わる書籍の貸借について分析する。表六は、『朝陽山文庫書籍目録』、『真覚寺日記』、『旭溪随筆』等の史料に依拠した、書籍の貸借関係を整理したものである。この表から、静照がどのような人物と書籍の貸借や書籍に関する交流をおこなっていたか明らかにしたい。

表六をみると、静照は一例のみだが、土佐藩領外から書籍を借用している（備考欄参照）。安政六（一八五九）年六月に『殿中間答』という思想の本を「イヨ国松林、従松林寺借得而写」している⁽⁶⁸⁾。「イヨ国松林」とは、伊予国（現愛媛県）の松林という地名のことだろうか。しかし、管見の限りでは松林という地名は伊予国にはみられなかった。松林寺は、大洲藩領喜多郡徳ノ森村（現大洲市徳森）にある臨済宗妙心寺末の寺院だと考えられる⁽⁶⁹⁾。同年五月二十八日頃に静照の弟である慈勲が予州から帰ってきている⁽⁷⁰⁾。慈勲は同年七月十一日に予州へと出発している⁽⁷¹⁾。慈勲が伊予から帰国し、再び伊予へと出発するまでの間に静照は『殿中間答』を松林寺から借りて写本を作成しており、伊予へ度々赴いていた慈勲との関係で伊予国の寺院から書籍を借りたと推測できる。

なお、本節では書籍の貸借及び交流を、宇佐浦とその周辺地域、高知城下とその周辺、松下与膳との交流の、三つに分けて考察をおこなうこととする。

（二）宇佐浦とその周辺

本項では静照と宇佐浦およびその周辺住人との本の貸借および交流を分析する。まず宇佐浦とその周辺での書籍の貸借を見たとき、大きく三つに分類できる。

第一に、寺院との貸借関係である。特に宇佐浦の浄土宗寺院である極楽寺からは『圓光大師傳』、『選択集講苑』、『近世續崎人傳』、『諸回向宝鑑』を借りている（表六参照）。例えば『真覚寺日記』には次のような記述がみられる。

十日晴大風寒し圓光大師傳を極楽寺より借得し今日より抜書す、夜彼岸中日の法座参詣三四人有

（万延二年二月十日条）

『圓光大師傳』と『近世續崎人傳』は仏教関係の伝記、『選択集講苑』と『諸回向宝鑑』は浄土宗の書籍であり、仏教関係の書物を借りていた。さらに極楽寺が『公武一

表六：貸借関係表

	人名	書籍	分類	貸借年月日	備考
借用	松下与膳	海外新話	外国史	安政3（1856）年4月21日	土佐藩藩士
		隣交微書	漢詩文	安政5年2月28日	
		三才圖會	漢籍（事典）		
		朱子文語纂編	漢籍（儒学書）	安政6年10月27日	
		史記	漢籍（史書）		
		資治通鑑	漢籍（歴史書）		
		逸史	雜史	万延元（1860）年3月23日	
		莊子口義大成俚諺鈔	漢学	文久2（1862）年6月16日	
		中外雜記	外事	元治元（1864）年10月19日	
		胡蝶物語	読本	慶應2（1866）年8月29日	
	江口方達	谷陵記	災異	安政2年5月朔日	城下水道町、医者
	与之介	海山里	仏教書	安政4年2月23日	宇佐浦、大工
	称名寺	西域記	漢籍（地誌）	安政5年4月29日	潮江村、寺院
	小松左伝太	陸沈畸談	伝記（土佐藩士伝）	安政5年9月9日	宇佐浦東町、医者
	浅見勘内	譜ノ本	不明	安政5年11月8日	小高坂村
	極樂寺	圓光大師傳	伝記	万延2年2月10日	宇佐浦、寺院、 静照の弟
		選択集講苑	仏教書（浄土）	文久3年3月20日	
		近世續畸人傳	伝記		
		諸回向宝鑑	仏教書（浄土）		
	城下	たのしみ草紙	遊戲	文久元年3月23日	不明
城下寺	聖學問答	漢学	天保8（1837）年夏写	寺院	
嶋崎清七	土佐国風俗記	風俗	文久2年7月20日	小高坂村	
		日蓮上人夢中方便地獄取沙汰			仏教書
	中野屋直太郎	厭蝕太平記			戦記
釈尊一代記圖會	仏教				
弘願寺	駁弁道書	仏教書（曹洞）	天保8年春季春写	西畑村、寺院	
	觀經鼓吹	仏教書（浄土）	従嘉永寅（1854）冬至翌卯春写之		
宇佐吉本氏	古事記	通史	天保8年秋写	宇佐浦、庄屋	
福智院	高野大師行狀編	仏教	弘化3（1846）年春写	宇佐浦、寺院	
	性靈集	漢詩文			
光寿寺	本山殿上對論記	不明	嘉永5年仲夏写	弘岡村、寺院	
イヨ國松林、松林寺	殿中間答	思想	安政6年春季夏写	伊予国、寺院	
緑屋傳平	雲上明鑑	名鑑	安政3年9月28日	宇佐浦、商人	
相手不明	箱根靈驗覽仇討の淨瑠璃の通り本	淨瑠璃/義太夫	安政5年9月朔日	不明	
		起信論義記			仏教書
		忍微和尚行業記	伝記		文久3年4月5日
		一枚起請梗概聞書	仏教書（浄土）		
貸出	松下与膳	扶桑鐘銘集	仏教書	安政4年4月10日	土佐藩藩士
		國姓爺傳	伝記		
	岡本隆玄	續三玉和哥集	和歌	文久3年7月5日	仁ノ村、医師
	中屋善藏	敵打の写本五六冊	読本類	慶應2年3月11日	宇佐浦、商人

注：『朝陽山文庫書籍目録』、『真覺寺日記』より作成。表の中の□は判読できなかった文字。

覧』という冊子を静照へ
持つて来ており、静照は
概略を『真覺寺日記』に
写している⁽⁷²⁾。また、前述
のとおり『唐詩選』を極
楽寺の小僧に贈与してい
る（表一参照）。安政五（一
八五八）年十二月十三日
から静照の弟である三誉
宝典が極楽寺住職を勤め
ており⁽⁷³⁾、同じ宇佐浦の寺
院であるだけでなく、安
政五年以降は血縁による
日常的な付き合いも多く
なり、書籍の借用などの
交流も行われるようにな
った。血縁による日常的
な交流を基盤にして、書
籍に関する交流がされて
いたといえよう。

静照は吾川郡西畑村（現高知市春野町西畑）にある浄

土真宗（東本願寺派）の弘願寺から曹洞宗関係の『駁弁道書』、浄土宗関係の『勤経鼓吹』を借りている。⁽⁷⁴⁾ 静照

の妻である佐保は弘願寺の住職花岡法璘の姉であり、親戚関係を軸にして書籍の借用がされたと考えられる。他

にも宇佐浦にある真言宗寺院の福智院からも書籍を借用している。福智院からは『高野大師行状編』、『性霊集』を借りている。⁽⁷⁶⁾ 弘化三（一八四六）年に書物を借りてお

り、どのような経緯で書籍を借りたかは不明である。借りた書籍はどちらも仏教書であり、同じ宇佐浦の寺院と

いう関係から書籍を借りたと考えられる。また、吾川郡弘岡村（現高知市春野町弘岡上）にある浄土真宗（東本願寺派）光寿寺からは『本山殿上對論記』を借りている。⁽⁷⁷⁾

宇佐浦および宇佐浦周辺の寺院との書籍の借用は、同じ地域にある寺院としての関係を基にされたものと考えられる。極楽寺や弘願寺はそれに加えて兄弟や親類といっ

た血縁関係を軸に交流したと推測される。

第二に、静照は商人から書籍の借用をしている。宇佐浦の中野屋直太郎という商人から『厭蝕太平記』、『釈尊一代記圖會』を借りている。『真覚寺日記』には次のよう

な記述がみられる。

五日晴暖、竹次を高知へ遣ル、五ツ半頃中の屋へ行
厭蝕太平記を戻しおき、釈尊一代記圖會をかり戻る
（慶應三年四月五日条）⁽⁷⁸⁾

中野屋直太郎は、『土佐市史』によれば、廻船業、鯉

漁船、鯉節製造、酒屋、質屋など様々な家業の経営を行
う富商であつた。中野屋は真覚寺の檀家ではなかったが、
中野屋直太郎は静照のところへ「御和讃の稽古」に通つ

てきており、和讃の師弟関係から、書籍を借用する間柄
になつたのであろう。また、中野屋直太郎が三十巻もあ

る『厭蝕太平記』を所有していたことにも注目したい。⁽⁸¹⁾

中野屋直太郎の蔵書数は不明であるが、宇佐浦でも有力
な富商であつた中野屋直太郎ならば、『厭蝕太平記』や『釈

尊一代記圖會』以外にも書籍を所有していたことは十分
に考えられる。

他にも宇佐浦新町の緑屋伝平という商人から『雲上明鑑』を借りている。⁽⁸²⁾ 緑屋伝平は廻船業を営んでいたよう

で、静照は緑屋伝平にたびたび京都や大坂への用事を頼
んでいる。⁽⁸³⁾ 緑屋伝平宅での「小寄法座」に静照も参加し

ており、真宗門徒としての交流を基に書籍の借用がなさ

れたと考えられる。

第三に医者との書籍の貸借がある。宇佐浦東町の小松左伝太⁽⁸⁵⁾からは土佐藩藩士伝である『陸沈畸談』を借りている。⁽⁸⁶⁾ 静照は何度も小松左伝太に病気の治療を頼んだり薬を貰っている。⁽⁸⁷⁾ このような交流を基に静照は小松左伝太から書物を借りるようになったと考えられる。荻慎一郎氏によると、小松左伝太の弟小松昌泉は医学修行のため京都に滞在しており、この小松昌泉を通して静照は京都の政治情勢について情報収集をしていたという。⁽⁸⁸⁾

吾川郡仁ノ村（現高知市春野町仁ノ）の地下医師である岡本隆玄には、『續三玉和哥集』を貸している。⁽⁸⁹⁾ 岡本隆玄も静照が病気の際に治療をしており、⁽⁹⁰⁾ 医者と患者としての交流を基に個人的にも交流がされていたようである。前述のとおり、静照は京都の政治状況について情報収集を行っていたが、岡本隆玄からも京都の情報を得ていた。『真覚寺日記』に次のようにいう。

七日晴暖也、晩方岡本隆玄来る、先度京都より到来せる状を持参し見せ呉ル（下略）

（文久三年九月七日条）

荻氏も指摘しているが、静照は宇佐浦庄屋の吉本元助

から『古事記』を借りている。⁽⁹¹⁾ 荻氏によると、吉本元助は庄屋層や藩の上級武士から書籍・文書を借りて、筆写をおこなっており、⁽⁹²⁾ 「書籍・文書の貸与筆写はこの場合、郷浦庄屋の相互間でおこなわれ、村役人間でも知のネットワークが形成」⁽⁹³⁾ されていた。

静照は宇佐浦在住の大工である与之介からも書物を借りている。「今日當浦大工与之介より海山里六編と七編と都合六卷借得し見る」（『真覚寺日記』安政四年二月二十三日条）とあり、『海山里』という仏教書を借りていた。静照は与之助に書物箱や書物機の製作を依頼している。⁽⁹⁴⁾ また、与之助が太子講の宿廻りとなつた際に、静照に大工中へ聖徳太子の御一生を聞かせてもらいたいと相談し、静照もこれを承諾し与之助宅で法話を行っていた。⁽⁹⁵⁾ おそらく与之助は真宗門徒であつたと考えられる。⁽⁹⁶⁾ 『海山里』という仏教書は与之助のような職人層が読めた書籍であるので、専門的なものではなく、仏教の説話集のようなものだと推測できる。当時の大工層が書籍を読むのが一般的であつたとは一概には言えないが、職人である大工の中にも本を読み、所有しているものがいたことが判明する。⁽⁹⁷⁾

『真覺寺日記』には「當所中屋善藏来る石炭ノ事二付右家ニ寄宿せる高岡ノ内田より被頼本ンを借り二来る敵打の写本五六冊貸ス」⁽⁹⁸⁾という記述がある。宇佐浦橋田の中屋善藏が、中屋の家に寄宿している「高岡ノ内田」に頼まれて静照に本を借りに来ていた。静照は中屋善藏へ「敵打の写本」を五六冊貸している。静照と「高岡ノ内田」との関係性は不明である。また、「高岡ノ内田」が直接借りに來ないで寄宿先の中屋善藏が借りに來ているが、「高岡ノ内田」が本を読みたいと中屋善藏に頼み、中屋善藏は静照のもとへ借りにきたとも考えられる。

小林文雄氏は関東の武州旛羅郡中奈良村の野中家の蔵書について分析し、書籍は「情報としての意味を持ち、村役人・豪農のネットワークが書籍＝情報収集の基盤となったが、蓄積された情報はこのネットワーク内で共有されるのみならず、他の農民諸階層への貸出も認められ、地域全体で共有されるという、一定度の公共性が付加されている」と指摘して、「蔵書の家」として位置づけた。⁽⁹⁹⁾静照が書籍を貸した事例は仁ノ村医師である岡本隆玄、土佐藩藩士の松下与膳、そして宇佐浦橋田の中屋善藏が高岡の内田に頼まれて借りに來たものしかなく、小林文

雄氏の指摘したような地域の階層を超えた貸出はみられないが、同じ宇佐浦の住民に静照が自身の書籍を貸し出したことが指摘できる。

以上、宇佐浦とその周辺の人々と静照との貸借関係および交流についてみてきた。主に宇佐浦では、寺院や医者、商人、庄屋や職人と、書籍の貸し借りをしていた。これらの人々との間には同じ地域の寺院や真宗門徒といった関係、血縁関係・親戚関係、医者と患者の関係などがあり、書籍の貸借に至ったと考えられる。

(二) 城下とその周辺

本項では高知城下およびその周辺での書籍の貸借や交流について考察する。城下およびその周辺の人々との本の貸し借りについては表六を参照されたい。また、『真覺寺日記』の中には、静照が読書をしている記述も多くみられるが、本稿末尾の表七はそれを整理したものである。城下とその周辺の地域での書籍に関する交流も大きく三つに分けることができる。第一に医者との交流である。静照は城下水道町の医師である江口方達から『谷陵記』

を借りていた⁽¹⁰¹⁾。江口方達とも、医者と患者という関係から、書物を借りたと考えられる。

第二に城下門徒との交流である。高知城下に隣接する土佐郡小高坂村の嶋崎清七⁽¹⁰²⁾から、『土佐国風俗記』と『日蓮上人夢中方便地獄取沙汰』を借りている⁽¹⁰³⁾。書籍の借用だけでなく、表七から分かるように、嶋崎清七を訪ねた際に、『西山遺事』、『国史略』、『四戦記』等を読んでいた⁽¹⁰⁴⁾（文久二年閏八月十九日）。『真覚寺日記』には、嶋崎清七が静照に正信偈の講釈を聞きに来ており、嶋崎清七は真宗門徒であつた⁽¹⁰⁵⁾。

同じ小高坂村の浅見勘内⁽¹⁰⁶⁾の家へ寄つた際には一絃琴を聞き、『譜ノ本』を借りている⁽¹⁰⁷⁾。静照は浅見氏の家でも度々法座をおこなつており、浅見勘内も真宗門徒であつたと考えられる。

城下の真宗門徒の中で注目したいのは、大徳屋および升永屋との関係である。『真覚寺日記』には次のような記述がみられる。

千蓮寺毎月の法座ハ嘉永五子年十月より大徳屋・升永屋発起頭にて眞覚寺不闕二法談勤来り候処、昨年の大變にて中絶今晚より又如元御法座始り参詣甚以

多し

（安政二年四月二十四日条欄外）

静照は嘉永五（二八五二）年十月から毎月城下の千蓮寺で法座をおこなっているが⁽¹⁰⁸⁾、その発起人は大徳屋と升永屋であつた。静照は千蓮寺での法座の際に数日間城下に滞在しており、大徳屋か升永屋に泊っている。大徳屋および升永屋での滞在中に、それぞれの家の蔵書を読んでいる記述が『真覚寺日記』中に度々みられる（表七参照）。

大徳屋は高知城下上町の本丁にある⁽¹⁰⁹⁾。大徳屋とは書籍を貸借した記述はみられないが、静照は大徳屋を訪れた際に大徳屋の蔵書を読んでいた。すなわち『太平記』、『北越雪譜』、『科註法華經抄』、『三災録』、『雲上明覧』、『山海里』、『鎌倉見聞志』、『二十四輩記圖會』、『妙好人傳』などである⁽¹¹⁰⁾。また、前述したように静照は大徳屋次男が上京する際に、書物の購入を依頼していた⁽¹¹¹⁾。

升永屋はおそらく城下升形の横町にあつたと考えられる⁽¹¹²⁾。静照は升永屋で『北斎漫画』、『後日怪談浮名簪』、『諸道ノ枝折』、『御聖教』、『謡本』を読んでいる。升永屋で読書をしたことが分かる記述を一例挙げておく。

二十一日晴天、四ツ時本丁へ来り九ツ前帰足、今日

も大ニ暑し八ツ半時帰着、昨日横町にて後日怪談浮名簪といふ造り本を見ル五臺山お馬一件を浄瑠璃二作れるなり、一兩日ゆりを覚えず。夜銀漢冴て大ニ涼し

『真覚寺日記』安政三年八月二十一日条

第三に寺院との交流がある（表六・表七参照）。静照は高知城下の南に位置する土佐郡潮江村にある浄土宗知恩院末の称名寺から、『西域記』という漢籍（地理書）を借りている。また、静照は千蓮寺で『法華経科註』を読んでいる⁽¹¹³⁾。他にも千蓮寺の月次法座の時に高知市浦戸町の遍照寺へ『日本書紀』の抜き書きを贈つており⁽¹¹⁴⁾、これらの寺院とは千蓮寺の法座等を通して交流があつたと考えられる。

他にも『真覚寺日記』中には「城下」や「高知」という記述のみで、人物の特定はできなかったが、書籍の借用の様子が分かるものがある。「城下」から『たのしみ草紙』という草紙を借りて見る記述⁽¹¹⁵⁾、「城下寺」から『聖学問答』を借りて写したことが分かる記述⁽¹¹⁶⁾や「高知」から送られてきた『太政官日誌』を見る記述⁽¹¹⁷⁾もある。

以上、静照と城下およびその周辺についての書籍の貸借や交流等について分析した。医者や城下および城下周

辺の真宗門徒、寺院などと書籍に関する交流がみられた。前述のとおり、静照は千蓮寺で毎月法座を勤めており、数日間城下へ滞在し、千蓮寺の法座には様々な寺院や門徒が訪れ、寺院や城下門徒と交流があつたと考えられる。

また、法座のために大徳屋や升永屋等の城下の真宗門徒の家へ宿泊したり、法座や御和讃の指導などの用で立ち寄る記述が多く見られ、毎月行われる千蓮寺の法座が静照の城下での交流に大きな役割を果たしていたと考えられる。

（三）松下与膳との交流

本項では、静照と親交の深かつた土佐藩藩士である松下与膳との書籍の貸借および交流を分析し、松下与膳との書物を通じた交流について考察する。

松下与膳は、名は綱武、鳳兮と号した。家は代々藩主山内家に仕え、馬廻組の松下綱彼次男として、天保十（一八三九）年八月二十三日に城下郭中（武家町）本町に生まれ、大正七（一九一八）年八月十日に八十歳で亡くなった。幼い頃から穎敏で優れた記憶力を持ち、中村十郎、

下坂丹助、柴田敬吉に就いて漢籍を学び、經史子集を講読し、劍術、槍術、馬術などを学んだ。松下与膳は十八歳で中国の上代から元に至るまでの二一部の正史である二十一史を読破、諸子百家に至るまで広く書籍に目を通したが、特に易学に通じていた。⁽¹¹⁸⁾万延元（一八六〇）年、与膳は二十二歳で大坂の警護を命じられ、文久元（一八六一）年には住吉陣営文校助教となり、同二年に土佐に帰国、藩校である文館助教となった。翌年、学問修行および「臨時御用」を兼ねて江戸へ行き、同年には帰国し、慶応三年、数え年二十九歳の時、藩校文館教授に任じられた。⁽¹¹⁹⁾二十九歳の若さで藩校致道館（文館）の教授になる等、優秀な人物であったことが窺われる。

松下与膳との書籍の貸借については表六を参照されたい。静照は松下与膳から『朱子文語纂編』、『史記』、『資治通鑑』、『逸史』、『中外雜記』、『海外新話』、『隣交徵書』、『胡蝶物語』、『莊子口義大成俚諺鈔』、『三才圖會』といった書籍を借りている。逆に静照は松下与膳に『扶桑鍾銘集』と『国姓爺傳』を貸している。蔵書の貸借の他にも『真覺寺日記』には、静照が高知城下および宇佐浦別

宅の松下与膳宅を訪れた際に、与膳の蔵書を読んでいる記述がみられる（表七参照）。⁽¹²⁰⁾静照は『曆算全書』、『周髀算經』、『唐宋八家文』、『類聚国史』、『中華沿革圖』、『新撰年表』、『史記』、『評林』、『韓昌黎文集』、『鉄研余滴』等の書籍を読んでいる。また、大坂の土産に与膳から漢籍である『林子』三十巻を貰ったという記述がある。⁽¹²¹⁾

荻氏によると、与膳と静照はたびたび討論をしており、「静照は仏教、松下は儒学と、その思想・宗教上の立場から社会・歴史観を巡ってしばしば論争となることもあった」と述べられている。⁽¹²²⁾『真覺寺日記』には次のような記述がみられ、静照と松下与膳が討論をしている様子がわかる。

二十六日晴七ツ半時晨、朝法座を勤如元歸る、九ツ時より松下へ行類聚国史の談より程朱ノ佛を学て佛を誇る小学外篇の形朽滅し神飄散するの辞太宗問對ノ六花八陣ノ論甲越合戰ノ時武田上杉両氏の備へ隊伍乱れず郎從士卒悉ク其指揮ニ從ひ名譽を後代ニ残せる咄しなと反覆討論するうち黄昏ニ及びけるゆへ升形へ戻り夜千蓮寺へ行、今日七ツ頃より雨ふり出し夜中大雨寒し（安政五年十一月二十六日条）

静照と松下与膳が「類聚国史」の話から「程朱ノ佛を学て佛を誇る」話、「小学外篇の形朽滅し神飄散する」話、「太宗問對ノ六花八陣ノ論」や「甲越合戰ノ時武田上杉両氏の備へ隊伍乱れず郎從士卒悉ク其指揮ニ從ひ名譽を後代ニ残せる咄し」を繰り返し討論したことがわかる。また、『真覺寺日記』には次のような記述がみられる。

同十七日雨、和漢両朝ノ儒家吾佛教を排斥せんとする文を集メ後日討論ノ爲ニ一卷とす、名ケテ排佛語纂とす今日書写終る。（文久元年十一月十七日条）

静照は「和漢両朝ノ儒家吾佛教を排斥せんとする文を集メ」て、後日の討論の為に一卷の書物にし、『排佛語纂』と名づけている。これは松下との討論の為に儒学についての情報収集をしていたと考えられる。静照は書籍を読み知識を吸収するだけでなく、知識を収集し利用していた。静照の読書の一端を知ることができる。

松下与膳とは詩のやりとりもおこなっている。『真覺寺日記』には次のような記述がある。

十七日曇、大風、夜松下祝席へ被招行、大酔四ツ頃戻り寝る、松下へ愚作ノ詩を贈る

（安政六年十二月十七日条）

二十一日晴、風ふく、寺子をつれ甫湊坂へ御花松を切二行、夜松下与膳自作ノ詩を持来る、夜中風有

（安政六年十二月二十一日条）

静照は松下与膳が城下本宅から宇佐浦橋田にある別宅へ移住した際に与膳の祝席へ招かれ、詩を贈っている。与膳もその後、静照へ自作の詩を持って来ている。松下与膳は藩士であるので、詩や和歌などの教養も豊富にあったと考えられるが、書籍の貸借だけでなく詩のやりとりといった文化的な交流もされていた。

ところで、『真覺寺日記』には次のような記述がある。

十一日半晴九ツ頃細木繁藏・庄屋楠平・郷老芳五郎組頭代・喜代平来り地帳二引合せ見合する処、谷川堀替異条なき由二付酒を出し、晩方皆々帰る、けふ八朝より本堂佛具磨物致ス処へ右之都合二付漸く日入二磨物相済、今日松下より僕書籍荷ヒ来り当寺へ預りおく夜大二草臥早々臥す

（安政六年十月十一日条）

十四日晴漆細工をする、一昨年より預り置たる書物を今日残らす松下へ戻し、夜風少しふく、此頃咳り少く相成安心する

（文久二年四月十一日条）

右の史料からは安政六（一八五九）年の十月十一日から文久二（一八六二）年四月十一日までの間、静照が松下与膳の蔵書を預つたことが判明する。荻氏も指摘しているが、「九日晴今日松下より預ル処の書籍七百卷余虫干する」⁽¹²³⁾とあるように、与膳の蔵書はおよそ七百冊を越える数であつた。⁽¹²⁴⁾与膳は万延元年に大坂勤務を命じられており、静照に蔵書の管理を頼んだと推測できる。自らの蔵書を預けるほど松下与膳と静照は個人的に親しい間柄であつたと考えられる。静照は与膳から預つた蔵書を読んでおり、例えば『真覺寺日記』には次のような記述がある。

晴大二風ふき寒し、一兩日以前より松下ノ蔵書たる
資治通鑑全部百四十八卷アリを借得し見る

（安政六年十二月二日条）

晴杉苗を買ひ大谷ノ地へ植る但し数五十本、松下より
預りける書物の内逸史を見る、夜中風有

（万延元年三月二十三日条）

静照は与膳の蔵書である『資治通鑑』や『逸史』を読んでいた。与膳から預つた書物を読んだということを明確に記しているものは右の史料しかないが、この他にも

与膳の蔵書を読んでいたと考えられる。

表七によると、松下与膳宅で十七部の書籍を読んでもり、与膳宅での読書量が多い。また、読書をした場所や本の所有者が分らず不明としたものの内、松下の蔵書を預つた安政六年十月十一日頃から松下の書籍を全て返す文久二年四月十一日までの間に読んだ書籍の数が約二十七部もある。書籍の分野は儒学書、漢詩文、漢籍、歴史書が多く、書籍の内容から見ても静照が松下与膳から預つた蔵書を読んでいたと考えられる。表四のように、『旭溪随筆』には、松下与膳から蔵書を預つた時期に、抜き書きをした書籍が多くみられ、それは表七にある静照が読んだ書籍の名前と一致する。⁽¹²⁵⁾また、年月の記載がない『旭溪随筆』其十三に『逸史』の抜き書きがあるが、静照は松与膳の蔵書である『逸史』を読んでおり、この時に『旭溪随筆』へ抜き書きを作つたと考えられる（表四・表七参照）。以上のことから、静照は松下与膳から預つた蔵書を読み、抜き書きを作成していたと推測できる。

宇佐浦や城下周辺の書籍の交流とは別に特筆すべき交流として土佐藩藩士である松下与膳と静照との交流を考察した。静照と松下与膳との間には書籍の貸借や討論を

したり、詩をやりとりする、文化的な交流がされていた。また、松下与膳の蔵書を長期間預かるほど、両者は懇意の間柄であったと考えられる。静照は松下与膳から預かった蔵書を読んでおり、読んだ蔵書の一部は『旭溪隨筆』などに抜き書きされ、静照の蔵書の一部となった。

松下与膳との書籍の貸し借りや松下与膳の蔵書を読む等の交流は、その書籍の貸し借りの数や、他の宇佐浦や城下の人々との書籍に関する交流よりも多く行われていた（表六・表七参照）。松下与膳から借りた書籍は儒学書である『朱子文語纂編』、『史記』、『資治通鑑』などの歴史書、外国史である『海外新話』や『中外雜記』といった当時の海外事情に関する本などである。与膳の蔵書を読んだ記述をみても、歴史書である『類聚国史』、『東華錄』や儒学書である『周易注本』、漢学の『關邪小言』などを読んでおり、静照の読書や書物収集は与膳の関心である儒学や歴史の影響を受けていたといえる。松下与膳と静照との関係は極めて個人的な関係であり、一般化はできないが、静照が儒学や外国史、歴史、さらに幕末の海外事情などの分野について松下与膳から影響を受けたこと、武士と一僧侶という身分差がありながらも、文化

的な交流がされたことが指摘できる。また、松下与膳の蔵書は与膳自らが形成したものであるかどうかは、史料的に確認できないが、彼の経歴からすると与膳自らが形成したものである可能性が高い。前述したように、与膳の蔵書数は七〇〇冊を超えており、青年期にこのような大量の蔵書を形成したとすれば注目すべきことであろう

おわりに

本稿では、土佐藩領宇佐浦真覚寺住職静照の蔵書目録である『朝陽山文庫書籍目録』の分析を中心に、幕末の一僧侶の蔵書目録および書籍に関する交流について明らかにした。

静照の蔵書の特徴として、一つは静照が一代でその蔵書を形成したことにある。先代の所有する書籍も一部含まれると推定されるが、その大半は静照が自ら収集した書籍である。

元々書籍があつたにも関わらず、静照が『真覚寺諸事記録』に「当寺古より書物一巻も無之」と書いたのも、静照が真覚寺で初めて本格的に書籍を揃えたという意識

があったためだといえる。しかし僅少なから先代である父正晴の蔵書も含まれ、真覚寺の寺号である「朝陽山」が蔵書目録の題名に使われたりと真覚寺の文庫としての側面もあった。

次に蔵書の多さが挙げられる。蔵書目録に記載された書籍の数や、『旭溪随筆』、『真覚寺日記』にみられる書籍の抜き書きや読書記事からもわかるように静照は非常に多くの書籍を読んでいた。蔵書を手し始めた頃は静照自身が僧侶ということもあり仏教書が多かったが、興味・関心は次第に和歌・漢詩、儒学、歴史・海外情報など幅広くなっていた（表一参照）。静照の蔵書は様々な分野の本で構成された重層性のあるものだった。また、静照は宇佐浦やその周辺、城下等の知人・友人からの書籍の貸借や読書などを通して写本や『旭溪随筆』に抜き書きを作成した。静照は自らの交友関係等を駆使して積極的に書籍を収集しており、静照の書物収集や学びに対する主体性や積極性が見受けられる。前述のとおり、京都の政治状況について友人・知人から情報収集をしたり、その興味関心は幅広く、書籍の収集も一僧侶というより、地域に住む一知識人としての活動だったといえる。

近世の寺院の蔵書についての研究の一つに、引野亨輔氏の備後国福山藩領藁江村の大東坊という真宗寺院の蔵書の研究⁽¹²⁶⁾がある。大東坊の蔵書数は一二三六部（明治期の洋装本は除外されている）であり、引野氏によれば、大東坊は地方の有力寺院であり、経済的な余裕があったこともあるが、学僧の輩出を大きな契機に蔵書が形成されたという⁽¹²⁷⁾。

また、蔵書は学僧大慶が収集した書籍が主であり、大慶の志向である真宗教学が反映された内容となっているが、寺子屋で使用した往来物、村民に自由に貸し出した謄本もあり、決して真宗教学の志向の書籍のみで形成された蔵書ではなかったとも、引野氏は指摘している⁽¹²⁸⁾。

また、近世後期の越中国射水郡葛葉村にある名苗家の蔵書についての松金直美氏の研究⁽¹²⁹⁾では、有力な肝煎であり、真宗道場としての側面を持っていた名苗家の蔵書数は四八四部八四四冊であった。松金氏は、実用書や娯楽本、儒学や漢詩などの幅広い分野の書籍を有していたが、真宗関連の書籍を多く所有していたこと、書籍から得た知識をもとに真宗道場としての立場を確立していったことを指摘している⁽¹³⁰⁾。

本稿では浦在住の僧侶、それも檀家数・規模が小さな寺院の蔵書目録の考察をおこない、小規模寺院の蔵書目録について明らかにした点に意義があると考える。

大東坊や名苗家の蔵書数からすれば少ないが、決して経済的に豊かでない静照が一代で約二〇〇部におよぶ蔵書を形成したことは、注目すべきである。

静照はたびたび『真覺寺日記』に書物の一部を引用している。静照が引用した書物の分野やその引用部分を分析することで、書籍から得られた知識が静照の思想にどのように影響したか明らかにすることができるだろう。

今後の課題としたい。

【注】

(1) 若尾政希『『太平記読み』の時代―近世政治思想史の構想―』（平凡社、一九九九年）、同「『書物の思想史』研究序説―近世の上層農民の思想形成と書物―」（『一橋論叢』第一三四巻第四号、二〇〇五年）など。他にも元禄・享保期の郷士の読書や貸借ネットワークの研究として、中子裕子「無足人の読書と文芸」（『奈良歴史研究』第四八号、一九九八年）、近世後期の庄内地域の名主で

ある佐藤家の蔵書や貸借についての研究に「近世後期庄内地域・名主佐藤家の書物ネットワークに関する一考察―「五峯館蔵書」と湯川真人「書物貸預記并書物注文代記」を中心に―」（『書物・出版と社会変容』第三号、二〇〇七年）がある。

(2) 横田冬彦「益軒本の読者」（横山俊夫編『貝原益軒―天地和楽の文明学』平凡社、一九九五年、以下横田氏Aとする）、同「近世民衆社会における知的読書の成立」（『江戸の思想』五号、一九九六年、以下横田氏Bとする）、同「近世村落社会における〈知〉の問題」（『ヒストリア』第一五九号、一九九八年、以下横田氏Cとする）。

(3) 同前。

(4) 同前。

(5) 前掲注2横田氏C論文、二頁。

(6) 小林准士「近世における知の配分構造―元禄・享保期における書肆と儒者―」（『日本史研究』第四三二号、一九九九年）。

(7) 同前。

(8) 小林准士氏前掲論文、九九頁。

(9) 小林准士氏前掲論文。

(10) 小林文雄「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」（『歴史』第七六号、一九九一年）。

(11) 同前。

(12) 同前。

(13) 川澤桂子「五藤家文書の蔵書目録史料について（上）

（下）」『土佐史談』第二二〇、二二一号、二〇〇二年・二〇〇三年。

(14) 遠藤隆俊「高知県所在の漢籍について」（『高知大学教育実践研究』第一七号、二〇〇三年）。

(15) 『高知県歴史辞典』（高知市民図書館、一九八〇年）「真

覚寺日記」の項によれば、『真覚寺日記』という名称は

寺石正路の命名によるものである。『真覚寺日記』は『地

震日記』一卷く九卷、『晴雨日記』一卷く五卷からなり、

真覚寺所蔵。本稿では高知地方史研究会編『真覚寺日記』

一卷く十卷（高知市民図書館、一九六九く一九七四年）

の翻刻刊行史料を使用する。

(16) 秋澤繁、荻慎一郎編『土佐の南海道』（吉川弘文館、二

〇〇六年）一六五く一六六頁、荻氏執筆分。

(17) 『真覚寺諸事記録』（真覚寺蔵）は「嘉永五星舎季孟秋改

書之、真覚寺第八在現住釋静照」とあるので、静照が嘉

永五年七月にもととあつた真覚寺に関する文書を書き

改めたものである。

(18) 『朝陽山高照院真覚寺傳記』（真覚寺蔵）は「嘉永六丑年

孟春改是」とあるので、嘉永六年の正月に静照によつて

改めて記された真覚寺の伝記だと考えられる。

(19) 『真覚寺日記』文久元年五月二十二日条には「二十二日

陰天、御堂へ参ル、九ツ頃集会所へ出る、飛檐官職御免

の申渡し有、飛檐出仕ノ義多年願望有、此度漸く存立俄

二上京いたしける二今日御免二相成事実二有難しく」と

ある。

(20) 『高知県人名事典 新版』（高知新聞社、一九九九年）静

照の項。

(21) 同前。

(22) 前掲『朝陽山文庫書籍目録』。

(23) 同前。

(24) 例えば、「二十一日晴、慈敷来り同道を以書林へ寄、明

史三傳等の本拾余巻求メ戻る」（『真覚寺日記』元治元年

四月二十一日条）とあり、静照は『明史三伝』を入手し

ている。また、「大阪へ注文したる御文讃嘆繪抄式冊、

中將姫行状記五冊、養生弁六冊、右十三巻の本出来」（『真

覚寺日記』慶應三年十二月十一日条）とあり、『御文讃

嘆繪抄』、『中将姫行状記』、『養生弁』を入手しているが、

蔵書目録にはこれらの書籍は記載されていない。「廿日

半晴、朝又西濱へ行、暑し、當寺所蔵の書物を残らす数

へしらべ夫々書物を扣置ク。」（『真覚寺日記』文久二年

八月二十日条）とあるので、静照は書籍を入手する度に

蔵書目録へと書き加えたわけではなく、一定の書物量に達してから蔵書目録に書き加えていたと考えられる。しかし、文久二（一八六二）年八月二十日に蔵書目録へ新たに書物を書き加えてから、『朝陽山文庫書籍目録』に追加されたのは、「外」の部に「厭蝕太平樂記、十五卷、慶應二寅春起筆依病発、停筆慶應三春再採筆写終」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）と「渡海之船筏、一冊、慶應三夏記真宗安心、永留自坊」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）のみであり、板本が追加された事実はみられない。横田氏は河内国北河内郡日下村の庄屋である森家の蔵書について考察しているが（前掲注2横田氏A論文）、森家の蔵書には「読本類をはじめとした実用書や教育書などの分野では益軒本を除いてほとんど含まれていない」（前掲注2横田氏A論文、三三五頁）とし、所蔵している本の中でも「書籍」に値するとみなされたものが「自家書籍目録」に載せられたのであろう。当時、儒学書などを「物の本」と称し、読本など平易なものより上級の書として区別されたことも事実であり、そうした意識を反映するものであろう（前掲注2横田氏A論文、三三五く三三八頁）としている。後述するが、静照が自作した書物や草紙類については必ずしもその全てが蔵書目録へ記載されるわけではなかった。横田氏の指摘のよ

うに、静照が蔵書目録に記載する書物を限定していたとも考えられるが、中国、明朝の正史の中で忠義伝・孝義伝・列女伝を収めたものである『明史三伝』や、蔵書目録の「写本之部」に既に記載されている『中将姫行状記』、仏教書である『御文讃嘆繪抄』などの書籍を静照が蔵書目録へ記載しないとは考えにくい。板本については後に書き加えようとしたのだろうか。静照が誰か知人や友人に頼まれてこれらの書籍を書林に赴き入手したとも考えられるが、日記中には、誰かに頼まれて書籍を入手したという記述はみあたらず不明である。蔵書目録に記載されていない板本の存在を指摘しておく。

(25)

横田冬彦「近世の学芸」（歴史学研究会、日本史研究会編『日本史講座六 近世社会論』東京大学出版会、二〇〇五年）。

(26)

同前。

(27)

同前。

(28)

『真覚寺日記』安政二年五月十四日条に「明日日ハ先住威勝院三回忌二付本堂より墓所迄之掃除をする」とあり、翌日には「今日法事之勤行中より墓参する辻雨やます」（『真覚寺日記』安政二年五月十五日条）とあるので、嘉永六年五月十五日に正晴が亡くなったと考えられる。また、『朝陽山高照院真覚寺伝記』（真覚寺蔵）には「正

晴ハ天明八申歳ニ生レ始ハ熊平トイフ」とあり、正晴は天明八（一七八八）年に生まれており、嘉永六年五月十五日に正晴は六十六歳であつたと推測される。

(29) 当初、蔵書目録には「板本部」の頭に「真覚寺文庫書籍目録」と書かれている。後に装丁した際に表紙に『朝陽山文庫書籍目録』と改められたものであろう。

(30) 横田氏によると、元禄・享保期の大坂周辺村落での書籍の「購入価格はおよそ銀一〇数匁で、十〇数十卷あるような大部のものであれば、十数匁〇数十匁する場合もある」と述べている（前掲注²³横田冬彦氏論文、三一〇頁）。幕末の土佐にこの購入価格が当てはまるわけではないが、書籍の購入の一端がわかる。

(31) 前掲『朝陽山文庫書籍目録』。

(32) 同前。

(33) 同前。

(34) 以下が「拔書」や「拔萃」という表記がされている一部である。「名義集三界義楷定記大藏法数 拔書 一卷 天保四巳年於阿州写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「三朝法林樵談 拔萃 一卷 同（天保―鍋島注）五午春於阿州写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「職原抄支流 拔書 一卷 同年（天保四年―鍋島注）写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「釈氏要覽 拔萃 一卷 同

（天保―鍋島注）五午冬写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「太平記盛衰記状 拔書 十九帙 同上（天保八

西夏写―鍋島注）」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「仏国曆象編 拔書 一卷 同（天保―鍋島注）十三寅秋写」

（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「性靈集 拔萃 一卷 右同（從福智院借得而写、弘化三年春写―鍋島注）」（前

掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「孫氏国字解 拔書 一卷 同年（弘化三年五月写―鍋島注）」（前掲『朝陽山文庫

書籍目録』）、「和漢三才圖會 拔萃 一卷 嘉永二酉季春写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「觀經鼓吹 拔書

一卷 自弘願寺借得而写、從嘉永七寅冬至翌卯春写之」

（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）。

(35)

小野玄妙編『仏書解説事典 第三卷』（大東出版社、一九三三年）「谷響續集」の項。『国史大辞典 第二卷』（吉川弘文館、一九八〇年）田中久夫氏執筆「運敵」の項。

(36)

前掲『朝陽山文庫書籍目録』。

(37)

同前。

(38)

「起寅冬至文久三亥歳而止合為九卷、地震日記、一卷、右同年（嘉永七―鍋島注）大變自記」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）とある。「地震日記」のはし書には「一、此録相應の名も有へきなれとも只自家後裔に傳示を是とす、かるかゆへ二地震日記と題するのミ、これ紀氏か土

佐日記の例に倣ふ」（『真覚寺日記』はし書部分）と記されている。

- (39) 「旭谿隨筆、三卷、嘉永巳酉春以後筆記」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「旭溪書捨、一卷、嘉永七寅六月予病中草稿、贈城下同行之写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）とある。

- (40) 例えば、『真覚寺日記』万延元年八月七日条には「松下幾尾より頼二付神國^{シニコク}の心得といふ草紙を綴り与ふ」という記述があり、慶應二年五月九日条には「城下某氏より頼まれたる草紙一昨日書始メ今日認終る名けて長久の礎といふ。」とある。

- (41) 『迷悟指南車』は「應城下同行需稿之」（『朝陽山文庫書籍目録』）とあり、城下の真宗門徒の要望で記された書籍であることがわかる。

- (42) 『真覚寺日記』（文久元年十一月二十二日条）。

- (43) 『真覚寺日記』（元治二年三月十一日条）。

- (44) 「大坂建立御文録、一卷、同年（天保九年—鍋島注）孟春写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「往生要集、三卷、同右（文政六未夏於大坂求之—鍋島注）」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）とある。

- (45) 荻慎一郎「寺子屋師匠の教養と生活—土佐藩領の寺子屋教育と民衆文化世界—」（『秋大史学』第五〇号、二〇〇

- 四年）。
同前。

- (46) 「石摺千字文」という書物は『国書総目録』には載っており、全国的に流通がされた書物でない可能性があるが、千字文は寺子屋の手習いの教科書として用いられて、各種の板本が出版されており、『石摺千字文』も寺子屋で使用されたと考えられる。（『国史大辞典 第八卷』（吉川弘文館、一九八七年）川口久雄・高瀬允氏執筆分「千字文」の項。）

- (48) 例えば、静照は宇佐浦東町の地下医師である小松左伝太へ、以下のように歌を贈っている。「此間小松左傳太へ哥一首を贈る、小松と云字を言葉二ふくませて、旅衣たち別れにし朝より帰りこん日をまつの浦風、今夜壺度小ゆり有」（『真覚寺日記』安政三年三月十一日条）。

- (49) 一例のみ挙げるが、以下のような記述がみられる。「十日晴天、風少くして春の来れるを身二覚ゆ、今朝鶯ノ初音を聞くより枕をもたけて法華経をよまぬ宗旨と知なから来て轉るハ我を勵るか」（『真覚寺日記』安政四年一月十日条）。

- (50) 井上隆明『近世書林板元總覧』（青裳堂書店、一九八一年）。

- (51) 前掲『朝陽山文庫書籍目録』

(52) 同前。

(53) 小林准士氏前掲論文。

(54) 鈴木俊幸『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』(平凡社、二〇〇七年) 六五頁。なお同書によると、売弘書肆とは往来物の出版元である三都書肆と組んで、各地の販売の拠点となった書肆で、天保頃から三都書肆が出版する往来物の刊記には出版元である板元以外に売弘書肆である各地の書肆の名が書かれるようになった。引用文の中の秋田屋太右衛門とは大坂の書肆である(同書四四〇六八頁参照)。

(55) 高松恵「江戸時代における高知城下町の町人地の町並み復原」(『高知県歴史民俗資料館研究紀要』第九号、一九九九年)。

(56) 同前。

(57) 引野亨輔「近世後期の地方書肆と村落民衆―倉敷書肆太田屋六蔵を事例として―」(『書物・出版と社会変容』第七号、二〇〇九年)。

(58) 同前。

(59) 荻氏によると、宇佐浦が領外に開かれており、静照が航海の安全を感謝・祈念のために寺を訪れた船乗りから領外の各種情報を入手したことを指摘している(前掲注43)。

(60) 『真覚寺日記』には静照が上京した時の様子も記されて

いる。上京した際に「晩方丁九へ行、御経書物類を求める(下略)」(『真覚寺日記』文久元年五月十七日条)とあり、静照は書林での書物の直接購入をしていた。

(61) 荻慎一郎「解題(『土佐国群書類従 第五巻』)」(高知県立図書館、二〇〇三年)。

(62) 例えば、仏教書である『山海里』は八回抜き書きされており、『性霊集』、『詩學字引』、『謡本』、『常山紀談』、『近思録』、『撰津名所図会』、『唐宋名家史論奇抄』はそれぞれ二回ずつ抜き書きされている。何度も抜き書きをするということは、それだけその書籍の内容に関心があったと考えられる。また、本の巻数が多く一度に抜き書きできなかつたということも考えられる。

(63) 前掲注59。

(64) ただし、この部数は『旭溪随筆』に複数回抜き書きした書籍についても一回抜き書きする毎に一部と数えている。

(65) 「廿九日薄陰、寺町ノ僕来る、称名寺の西域記十二巻を借得し見る」(『真覚寺日記』安政五年四月二十九日条)という記述がある。

(66) 「十九日九ツ頃より松下へ行、史記評林韓昌黎文集鉄研余滴杯を見る」(『真覚寺日記』安政五年十月十九日条)。

(67) 前掲注2横田氏B論文、五三頁。

(68) 前掲『朝陽山文庫書籍目録』には「殿中問答、一卷 イ

ヨ国松林、從松林寺借得而写、安政六未季夏写」と記載されている。また、「十四日晴暑甚し殿中間答を写し始る（下略）」（『真覺寺日記』安政六年六月二十四日条）とあり、『殿中間答』を写本にしていた。

(69) 『角川日本地名大辞典 三八 愛媛県』（角川書店、一九八一年）四五三頁、七七四頁徳森の項。

(70) 「同二十八日晴、七ツ半時出足、山田ヲ橋ヲ南へ渡り潮江天神ノ森より西ニ向ひ長谷を越し西分にて休ミ秋山より仁ノ村渡しをこへ九ツ半頃首尾よく歸寺、此間弟慈勲も与州より歸り久し振りニ對面、母も極樂寺も互ニ恙なきを悦ふ」（『真覺寺日記』安政六年五月二十八日条）という記述があり、この頃に慈勲が「予州」（伊予国）から歸ってきたことがわかる。

(71) 「同十一日晴今朝慈勲又豫州へ行、用居口通りノ切手を取る。」（『真覺寺日記』安政六年七月十一日条）。

(72) 『真覺寺日記』慶應四年閏四月二日条には「極樂寺公武一覽といへる大坂にて板行ノ冊子を持来り見る、是則當春京坂ノ間夫々の御役義を蒙る御方々を記したるもの也、依てその梗概を写す事左ノ如し（下略）」とある。

(73) 吉村淑甫『海南九人抄』（高知市民図書館、一九八四年）。また、『真覺寺日記』にも「今日佐川光明寺当寺舎弟当浦極樂寺へ轉住ニ付当寺へも悦びの人かハる

来ル（下略）」（安政五年十二月十三日条）とある。

(74) 「駁弁道書、二卷、自弘願寺借得而写、右同（天保八西季春写―鍋島注）」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「観經鼓吹、拔書、一卷、自弘願寺借得而写、從嘉永七寅冬至翌卯春写之」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）という記述がある。

(75) 吉村氏前掲書。

(76) 「高野大師行狀編、一卷、從福智院借得而写、弘化三年春写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）、「性靈集、拔萃、今ハナシ、一卷、右同（從福智院借得而写、弘化三年春写―鍋島注）」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）。

(77) 「本山殿上對論記、一卷、從光壽寺借得而写、同年（嘉永五年―鍋島注）仲夏写」（前掲『朝陽山文庫書籍目録』）。

(78) 『土佐市史』（土佐市史編集委員会、一九七八年）五三九～五四二頁参照。

(79) 檀外である中野屋直太郎より亡き父の菩提の為に新田を真覺寺に寄進する記述（『真覺寺日記』安政六年三月十四日条）がある。

(80) 「中野屋直太郎御和讃ノ稽古ニ来る。」（『真覺寺日記』慶應元年閏五月十四日条）。

(81) 「朔日小雨、四ツ頃より晴ル、一昨年写し始たる厭蝕太平記三十卷漸く今日写し終る、夜星明也、少々ツ、咳る」

- (87) 『真覚寺日記』 慶應三年四月朔日」とあり、中野屋の所有する『厭蝕太平記』が三十巻であったことが分かる。
- (82) 「二十八日晴天、今朝又西濱へ行、今日西濱にて角力ノ地取り有、夜緑や傳平御取越へ行、雲上明鑑を借り来ル」『真覚寺日記』安政三年九月二十八日条。
- (83) 例えば、「緑傳方へ寄京都への用事を頼置戻る」(『真覚寺日記』万延元年八月十八日条)とある。
- (84) 「八ツ時緑や傳平方小寄法座有て行」(『真覚寺日記』安政三年七月十七日条)とある。
- (85) 荻氏も小松左伝太が宇佐浦の地下医師だったとしている(前掲注43)。
- (86) 「九日晴小松より陸沈崎談を借得(シャクトク)借^{シャクトク}得して見ル」(『真覚寺日記』安政五年九月九日条)とある。
- (87) 一例のみ挙げておくが、「小松にて薬を貰頻りにむせ共発汗せず、毎年一兩度ツ、此病二懸り難儀するも前生の業感なるへしと自ラあきらめて念佛する」(『真覚寺日記』安政六年十一月十三日条)。
- (88) 前掲注43。
- (89) 「岡本隆玄来る、病気の始終を咄し口早灸にて引七宜かるへしとて引灸の指圖し呉る、續三玉和哥集二巻を貸ス」(『真覚寺日記』文久三年七月五日条)。
- (90) 「けふも頭痛二付岡本隆玄より薬を貰ひ頻り二服用す」

- (91) 『真覚寺日記』文久元年六月七日条)といった記述がみられる。
- (92) 前掲注43や前掲注59の中で指摘されている。
- (93) 前掲注59、四八六頁。
- (94) 『真覚寺日記』には「五日雨天、四ツ時より晴ル、晚方寺子をつれ西濱大工与之助方へ詔置たる米櫃書物箱を取二行」(安政三年八月五日条)や「二十七日晴天、五ツ時大工与之介方へ御書机を取二行」(安政四年三月二十七日条)といった記述がある。
- (95) 「今日は太子講にて宇佐浦大工与之助宿廻り二付右家へ拙僧を招キ聖徳太子の御一生の有様大工中へ為説聞貴度段与之助より相談二来ル、九ツ半頃雨中二西濱与之助宅へ行く、大工中來集之上太子の行状肝要之所計演説する夫より酒宴暫く有て客同土喧嘩 漸く取治メ日暮頃帰ル、夜雨やむ、四ツ時ゆる小」(『真覚寺日記』安政三年一月二十二日条)。
- (96) 他にも与之介が静照の所へ「御文の稽古」に來る記述(『真覚寺日記』安政五年五月五日条)もある。
- (97) なお、荻氏は静照が大工与ノ介の書籍を借覧したことに ついて、「宇佐浦職人の子弟や女子が寺子屋に通つていたことは前述したが、その親にも一定の教養をもつてい

た層がいたのである。」(前掲注43)と指摘している。

『真覚寺日記』(慶應二年三月二十一日条)。

小林文雄氏前掲論文。

同前。

(101)(100)(99)(98)

「朔日曇天、朝五ツ時續て忒度小ゆり、今日入梅、宝永地震の記谷陵記と題せるを水通江口氏より借り来り」

『真覚寺日記』安政二年五月一日(日条)や、「谷陵記一卷 宝永大変記也自水通江口氏借得而写、安政二卯四月下院写」(前掲『朝陽山文庫書籍目録』)といった記述がみられる。

嶋崎清七の身分については不明である。

(103)(102)

一例のみ挙げておくが、「二十日晴、大暑四ツ時より嶋崎へ行、西山遺事二巻を見る、土佐国風俗記及び日蓮上人夢中方便地獄取沙汰といへる両巻の冊子を借り八ツ半時横町へ寄ル」(『真覚寺日記』文久二年七月二十日(日条))という記述がある。

(104)

「二十日晴、嶋崎清七尋来る、八ツ半時横町へ行、嶋崎又来り正信偈講釈聞度由望二付略説して聞しむ」(『真覚寺日記』文久元年九月二十日(日条))。

(105)

なお、静照は嶋崎清七が死去した時に「此清七といふ人ハ其質柔和にして佛法ニ志厚く予も多年交りしニ元来病身終ニ返らぬ旅ニ趣きしと聞是迄の事を思ひ出歎惜す誠

二憐れむへし。(下略)」(『真覚寺日記』慶應元年七月十五日(日条))と記している。嶋崎との交流の深さをみてとれる。

(106)

「八日晴、光壽寺用事有て尋来る、九ツ半頃より寺町へ行、一杯のミ日入頃より小高坂浅見へ行、夜九ツ頃御法座済より横町へ行泊る、今夜浅見にて一絃琴を聞ク譜ノ本を借来る、風吹キ寒し」(『真覚寺日記』安政五年十一月八日(日条))という記述がある。

(107)

例えば、「廿二日晴、大風、九ツ頃より嶋崎へ行、御和讃ノ講談する、酒食ノ馳走ニ逢ひ火燵にて寐る、日暮て後同所浅見法座へ行、四ツ頃相済横町へ行」(『真覚寺日記』文久二年二月二十二日(日条))といった記述がみられる。

(108)

これについては荻氏も「毎月中旬に城下へ赴き数日間滞在し、法座を勤めており多忙であつた」(前掲注43)と指摘している。

(109)

『真覚寺日記』には「十七日晴天、朝六ツ時より城下へ行、森山にて日出ル、鶉坂にて初て日傘を挿す大ニ暑し、五ツ半時本丁着、大徳屋新宅にてまた北越雪譜を讀終ル」(安政三年六月十七日(日条))とあり、大徳屋は本丁(本町)にあることが判明する。また、「廿六日晴、城下の客歸る、忒三人手傳來り終日家具類の始末する、城下より頼まれたる御取越の勤行する、夫より上下二巻の御經を拝

讀する、是ハ高知大徳屋喜平當月廿一日病死の由廿四日二直人來ル、予數ヶ年此人の世話ニ成り毎月千蓮寺の法座を勤る処五十六才を一期として墓^{マツ}なくなれり、予も數行の涙ニむせひ是までの深情を新しく思ひ出ス、其生レ附キ正直質朴にして世ニ誨ハす物ニ驚く事なく古風を好ミ流行事^{ヘヤリ}を惡む、然も御法義ヲ厚く喜ひ當九月二予か出府ノ節も御聖教を持出て何角法文を尋ねたりしニ如何せん無常の風ニ誘ハれて木の葉と共に散りうせぬ、哀レにも亦殘念也、今晚より右喜平初七日ニ當ルゆへ當寺ニ於て讀經致し吳度段伴弥太郎より頼來れるニ付勤行致せし也、夜陰る」(『真覺寺日記』慶應三年十月二十六日)とあり、千蓮寺での法座の世話をしていた「大徳屋喜平」が病死したとある。『真覺寺日記』同年十一月十七日条には「同十七日晴風少々吹く四ツ半頃より高知へ行七ツ前升形着先達而の見舞を述べ風呂二入休息する」とあり、静照は「升形」に着いて「先達而の見舞」を述べているが、「先達而の見舞」というのは大徳屋喜平の死去のことであると考えられ、「升形」は大徳屋のことだと考えられる。『真覺寺日記』の中では大徳屋と記述されることは少なく、大徳屋のあった場所である「升形」や「本丁」と記述されていることが多い、本稿ではこれら全てを大徳屋としている。

(110) 例えば、「十九日晴天、五ツ過新井口を出て水通江口氏へ寄、大徳屋へ行風呂二入太平記を見ル、日入頃ゆる小」

『真覺寺日記』安政三年四月十九日条 といった記述がみられる。

(112)(111) 『真覺寺日記』(万延元年四月二十九日条)。

「十九日晴天、五ツ時新井口を出て子細有て八幡ノ宮へ參詣する、道昭法師入唐ノ時新羅國山中ニ於て五百ノ群虎を教化し給ふ圖の繪馬拜殿ニ掲け有、夫より横町へ来り舂永屋にて涼む」(『真覺寺日記』安政三年六月十九日条)という記述があり、静照が日記中で度々訪れている「横町」とは升永屋のことだと考えられる。

(113) 「廿一日晴、四ツ半頃より千蓮寺へ行、日中法座濟より法華經科註を見る、真光寺・福典寺・永福寺・伝照寺・高法寺等參詣する、夜雨ふる、千蓮寺にて泊る」(『真覺寺日記』(安政六年八月二十一日条)。

(114) 「十九日陰天寒し四ツ頃より弘岡へ寄高知へ行、八ツ半時升形着、夜千蓮寺法席へ參る、遍照寺へ日本書紀の抜書を遣る」(『真覺寺日記』安政六年三月十九日条)。

(115) 「二十三日晴寺子霧嶋躑躅の枝を折りしゆへ大二呵る古哥二牛馬二塩をつけて喰ふ馬士よりも寺子をとりに喰ふそおそろしといへるをおもひ出し獨り笑ふて許し遣る、城下よりたのしみ草紙といふを借り来り開キ見れハ(下

略」(『真覚寺日記』文久元年三月二十三日条)とある。

(116) 「聖學問答、一卷、從城下寺借得而写、同年(天保八年)夏写」(前掲『朝陽山文庫書籍目録』)。

(117) 「九日半晴、此間高知より太政官日誌といふ本を一見セよとて送り来る、皆當年禁裏御所の要用を誌す処也、其中一兩章を写し置く事左ノ如し(中略)不日二右本紙城下へ返進。」(『真覚寺日記』慶應四年六月九日条)。

(118) 岡林九敏「松下鳳兮略傳」(『土佐史談』第十六号、一九二六年)六八〇六九頁参照。

(119) 『御侍中先祖書系図牒』(高知県立図書館蔵(「原本(財)土佐山内家宝物資料館所蔵」)に拠る)。

(120) 松下与膳は城下に本宅があつたが、安政六年十二月十五日から文久二年九月二十二日まで宇佐浦橋田に別宅があり、城下の本宅でだけでなく、別宅でも交流がされていた。

(121) 「松下より帰国土産として唐本林子四十巻を貰ふ、是ハ明末二林兆恩といふ有て儒釈老ノ三教一致ノ義を論し書を著す、門人甚多く其説二歸する者閩中尤夥し(下略)」

(『真覚寺日記』文久二年六月十四日条。
前掲注43。

(122) 『真覚寺日記』(万延元年六月九日条)。
前掲注43や前掲注59で指摘されている。

(125) 例えば、「九日雨、今日近世人鏡録を一覧終る、十巻晩方より近思録の註解を見る」(『真覚寺日記』万延元年五月九日条)や「十一日風雨、波高し、八ツ頃雨やむ、夜

一天雲なく始て星月を見ル、近思録一見終り山陽遺稿を見る」(『真覚寺日記』万延元年五月十一日条)とある。

静照は儒学書である『近思録』を万延元(一八六〇)年五月九日〓十一日の間に読んでゐる。『旭溪隨筆』其八は万延元(一八六〇)年五月〓同年七月に作成した抜き書きをしたものであり(表四参照)、『近思録』の抜き書きも含まれており、おそらく『近思録』を読み、『旭溪隨筆』に抜き書きを作成したと考えられる。

(126) 引野亨輔「近世真宗僧侶の集書と學問―備後国沼隈郡大東坊を素材として―」(『書物・出版と社會変容』第三号、二〇〇七年)。

同前。

(127)(128)(129) 松金直美「近世後期真宗道場における文化受容―越中国射水郡葛葉村名苗家藏書を素材として―」(澤博勝、高

埜利彦編『近世の宗教と社會3 民衆の「知」と宗教』

吉川弘文館、二〇〇八年)。

(130) 同前。

表一：『朝陽山文庫書籍目録』にみる年代別書籍の入手

入手時期	書籍	巻数	入手場 所	分類	板本・ 写本	備考
文政6（1823）年未 夏	易行品	1 巻	大坂	仏教	板本	
	論註	2 巻	同	仏教	板本	
	安樂集	2 巻	同	仏教	板本	
	玄義分序分義	1 巻	同	仏教	板本	
	定善義散善義	1 巻	同	仏教	板本	
	往生礼贊	1 巻	同	仏教	板本	
	法事讃	2 巻	同	仏教（浄土 宗）	板本	
	観念法門	1 巻	同	仏教	板本	
	般舟讃	1 巻	同	仏教	板本	
	往生要集	3 巻	同	仏教（浄土 宗）	板本	
	選択集	2 巻	同	仏教（浄土 宗）	板本	
	愚禿鈔	1 巻	同	仏教（真宗）	板本	
	四書 道春点	10巻	不明	儒学書	板本	「所望有之譲ル今 ハナシ」、○
文政8（1825）年2月	詩学貫珠	5 巻	同	漢詩	板本	「小本」
	日本詩礎	1 巻	同	漢詩	板本	「小本」
文政13（1830）年	京都惣會所演説	2 巻	同	仏教※	写本	「今ハ合為一巻」
天保元（1830）年	石摺千字文	1 巻	同	往来物※	板本	
	唐詩選	合本 1 巻	同	漢詩	板本	「古本」、「贈与 極楽寺小僧」、○
天保3（1832）年7月	小倉百詠註解	1 巻	同	不明	写本	
天保4（1833）年	名義集三界義楷定記大藏 法数 抜書	1 巻	阿州	仏教	写本	
	御一代聞書	1 巻	同	仏教	写本	
	柴門玄話	1 巻	同	仏教	写本	
	廣書分節 石口科目	1 巻	同	不明	写本	
	教行信証聴録	1 巻	同	仏教（真宗）	写本	
	教行信証行巻聴記	1 巻	同所聴 記	仏教※	写本	「今ハナシ」、○
	三願三機三往生録	1 巻	同所写	仏教※	写本	
	職原抄支流 抜書	1 巻	不明	法制・注釈	写本	
	讃州勝之助漂流記	1 巻	不明	漂流記※	写本	
天保5（1834）年春	御本書	4 巻	不明	仏教	板本	「青表紙」
	大經讀講演	1 巻	於阿州 聴記	仏教※	写本	
	三朝法林撫談 抜萃	1 巻	阿州	仏教	写本	
同年3月	唱導輔弼録	1 巻	不明	不明	写本	「同年三月初筆」
	聖教研究録	1 巻	不明	不明	写本	「同年三月初筆」

同年	思德讚改悔文談林	1 卷	阿州	仏教	写本	
同年8月	二教論宝鑰秘鍵	合 1 卷	不明	仏教※	写本	
同年冬	釈氏要覧 抜萃	1 卷	不明	仏教	写本	
天保6（1835）年春	慶安太平記	3 卷	不明	実録	写本	
同年夏	二十四輩順拜記	1 卷	京師	仏教	板本	「横小本」
	和漢年表録	1 卷	京師	年表	板本	「小本」
同年	長崎図	折本 1 卷	不明	地図※	板本	
	京都図	折本 1 卷	不明	地図	板本	
	大坂図	同（折本 — 鍋島 注） 1 卷	不明	地図	板本	
	北斎漫画	1 卷	不明	絵画	板本	「豊後ノ息女之遣 ス」、○
	小野篁歌字盡	1 卷	不明	往来物	板本	
	大經聞信編	前編 6 卷	播州	仏教※	写本	
同年秋	教行信証惣序教卷聴記	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	「天保六未秋聞記」
	相承高僧讃法話	1 卷	播州	仏教※	写本	
同年季秋	藤井寺靈驗記	1 卷	播州	仏教※	写本	
同年冬	廣長菴玉手箱	1 卷	不明	不明	写本	「今ナシ」、○
	善光寺大原両因縁	1 卷	不明	不明	写本	
	四季勤行式	1 卷	播州	不明	写本	「天保六未冬在播 州記」
	聲明本	1 卷	播州	仏教※	写本	「天保六未冬於播 州写」「小本」
天保7（1836）年夏	龍驤虎歩	1 卷	不明	不明	写本	「横本」
天保8（1837）年季 春	小学	2 卷	不明	儒学書	写本	
同年孟春	正信偈考談	2 卷	不明	仏教	写本	「横本」
	駁弁道書	2 卷	弘願寺	仏教	写本	「自弘願寺借得而 写」
同年夏	聖学問答	2 卷	城下寺	漢学	写本	「從城下寺借得而 写」
	獨眠枕之伽	—	不明	不明	写本	
	太平記盛衰記狀 抜書	19 帙	不明	軍記物語※	写本	
同年秋	古事記	3 卷	宇佐吉 本氏	歴史書	写本	「自宇佐吉本氏借 得而写」
同年冬	弁道書	1 卷	不明	漢学	写本	「安政三辰年写改 之」
	中將姫行狀記	1 卷	不明	仏教	写本	
天保9（1838）春	四天王寺図	折本 1 卷	不明	地図※	板本	
	言々海	1 卷	不明	仏教（日蓮）	板本	
	釈尊一代記	1 卷	不明	仏教※	写本	
同年孟春	大坂建立御文録	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	
同年仲春	復仇要玉砵	1 卷	不明	不明	写本	
同年夏	敵討親子塚	1 卷	不明	黄表紙	写本	
同年初夏	三国誌傳姓氏	1 卷	不明	不明	写本	「小本」

同年冬	平太郎事蹟談	5 卷	高府	伝記	板本	「天保九戊冬於高府求之」
	御傳鈔	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	
	熊谷行狀編	1 卷	播州	不明	写本	
同年	两部神道口訣抄	6 卷	不明	神道	板本	
	御直命演説	4 帙	播州	仏教※	写本	「惣会所演説聴記ノ終リニ添フ」
	大經聞信編	後編 6 卷	播州	仏教※	写本	「同九戌年於同所（播州一鍋島注）」
天保10（1839）年春	斜陽東暉録	1 卷	不明	不明	写本	
同年孟夏	三国誌簡牘	1 卷	不明	不明	写本	「小本」
同年秋	正信偈考	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	「天保十亥秋考誌」
天保11（1840）年初夏	剽謗録	1 卷	不明	仏教（真宗）	板本	
同年仲夏	聖徳太子実録	1 卷	不明	伝記	写本	
同年夏	論客護法篇	1 卷	不明	不明	板本	
同年冬	元亨釈書和解抄要	1 卷	不明	仏教伝記	写本（外）	
天保12（1841）年	唐詩選	3 卷	不明	漢詩（入門書）	板本	「点附」
天保13（1842）年春	幼學詩韻	1 卷	高府	漢詩	板本	
同年秋	仏国曆象編 拔書	1 卷	不明	天文・曆	写本	
天保14（1843）年春	仏法双六	折本 1 卷	不明	双六	写本	
同年8月	円機活法五	1 卷	古物店	詩学	板本	
	唐詩正聲	2 卷	同	漢詩	板本	「小本」
	万宝智恵海	1 卷	同	家事	板本	「小本」
	琴曲松ノ調	1 卷	同	歌謡	板本	「小本假名附」
	大學中庸合	1 卷	同	儒学書	板本	「小本」
	四書字引	1 卷	同	辞書	板本	
同年夏	本朝語園 空華談叢 谷響續集 板書	1 卷	不明	隨筆 仏教（真宗） 仏教	写本	
同年冬	大日本史 楠氏義経傳	1 卷	城下水道町	通史	写本	
天保15（1844）年	雲上便覧	折本 1 卷	不明	名鑑	板本	
同年仲春	字林玉篇	1 卷	不明	語学	板本	写本之部に記載。
弘化2（1845）年秋	六要鈔全部	10 卷	大坂	仏教（真宗）	板本	
同年8月	阿弥陀経鼓吹	18 卷	不明	仏教（真宗）	板本	
同年初秋	三国誌傳展書	11 卷	不明	不明	写本	「弘化二巳初秋遂功終」
同年冬	愚迷発心集	1 卷	不明	仏教	板本	
弘化3（1846）年孟春	蒙求	3 卷	不明	漢学	板本	
同年秋	御本書御自釈	1 卷	京都	仏教※	板本	「冊表紙」
	神国決疑編	1 卷	不明	神道	板本	
同年春	三教指帰	1 卷	不明	仏教（真言）	写本	
	一枚起請聞信編	1 卷	不明	仏教※	写本	

	高野大師行狀編	1 卷	福智院	仏教※	写本	「從福智院借得而写」
	性靈集 拔萃	1 卷	福智院	漢詩文	写本	「從福智院借得而写」、「今ハナシ」「小本」、○
同年5月	孫氏国字解 拔書	1 卷	不明	兵法	写本	
弘化4（1847）年正月	當山佛具類寄附録	1 卷	不明	真覺寺関係書物	写本	「萌黄表紙」、「弘化四未正月改写」
同年春	三教指帰刪補鈔	9 卷	不明	仏教（真言）	板本	
	三教指帰畧解	2 卷	不明	仏教（真宗）	写本	「弘化四未春考誌」
同年夏	大經重誓偈講苑	1 卷	不明	仏教※	写本	「弘化四丁未夏誌」
	自問自答御文研究録	1 卷	不明	不明	写本	「同（弘化四丁未夏誌—鍋島注）」
弘化5（1848）年春	坊守異見狀	1 卷	不明	不明	写本	
嘉永2（1849）年春季	詩学選丹	2 卷	不明	漢詩	板本	
	詩語淵源	1 卷	不明	漢詩	板本	
	和漢三才圖會 拔萃	1 卷	不明	百科事典	写本	
	真宗故実傳來鈔	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	
同年春以後	朝夕備忘 旭谿隨筆	3 卷	不明	自作（書籍の拔書）	写本	「嘉永巳西春以後筆記」
嘉永3（1850）年仲春	掌中詩韻	1 卷	不明	漢詩	板本	「小折本」
	称觥堂藏板目錄	1 卷	不明	書目※	板本	「小横本」
	古調梯	1 卷	不明	歌学	板本	「同（小横本—鍋島注）」
同年季春	元亨釈書	15卷	不明	仏教伝記	板本	
同年春	真宗分流記	1 卷	姫路	仏教（浄土）	板本	「小本」
同年夏	地球圖	1 卷	藻洲潟	地図	板本	「折本」、「從藻洲潟横田氏到来」
嘉永4（1851）年夏	扶桑鍾銘集	3 卷	不明	仏教書（金石文）	板本	
	塵餘	2 卷	不明	不明	板本	
	藤井寺観音靈驗記	1 卷	不明	不明	写本	「安政元寅年當山弟純肇全散失依之文久二戊仲秋再写改之」
同年霜月	国姓爺傳	2 卷	不明	伝記	板本	
嘉永5（1852）年初夏	御學寮講師録	1 卷	不明	仏教書	写本	
同年仲夏	本山殿上對論記	1 卷	光寿寺	仏教※	写本	「從光寿寺借得而写」
同年季夏	御繪傳指圖考述	1 卷	不明	仏教	写本	
同年同月	画相指嚢	1 卷	不明	仏教（真宗）	写本	
同年仲冬	教典志	1 卷	不明	仏教（真宗）	板本	
	真宗聖教目錄	1 卷	不明	仏教（真宗）	板本	
同年冬	助語審象	3 卷	不明	語学	板本	「小本」
	舌端泉湧録	1 卷	不明	自作	写本	「横本」、「嘉永五子冬以後筆記」

嘉永6（1853）年仲春	破異解描 草稿	1 卷	不明	自作	写本（外）	「与西派異解者對論筆記」
同年季春	孔子家語	5 卷	不明	儒学書	板本	
	文選正文	13 卷	不明	漢詩	板本	「所望有之讓ル今ハナシ」、○
	文選字引	1 卷	不明	辞書	板本	「所望有之讓ル今ハナシ」、○
	古今集遠鏡	6 卷	不明	和歌・注釈	板本	
	歌枕秋寢覚	13 卷	不明	歌学	板本	「所望有之今ハナシ」、○
	和歌濱之真砂	7 卷	不明	歌学	板本	「所望有之今ハナシ」、○
	草菴集	1 卷	不明	歌集	板本	「小本」
	續三玉和哥集	2 卷	不明	和歌	板本	「同六癸丑春改写」
同年春	真覚寺世代須知	1 卷	不明	真覚寺関係書物	写本	「小本」
同年夏	真宗假名聖教	武帙 3 卷	御本山	仏教（真宗）	板本	「於御本山御免」
同年	真宗西派法要	4 卷	不明	仏教（真宗）※	板本	「以余本与純肇交易」
同年仲秋	旭谿獨笑 柴荊夜話写添	1 卷	不明	自作	写本（外）	「同年仲秋作柴荊夜話評斥破異解猫口者不得已予復以此草稿彈破夜話」
同年極月	兵法七書正文	2 卷	不明	兵法	板本	
	土佐国漂流人申口	1 卷	不明	漂流記※	写本	「安政四巳夏随御使僧常德寺之指圖別二卷写改献上」
	簞篋内傳	2 卷	不明	曆・占卜	板本	
嘉永7（1854）年春	諸国名所歌百首	1 卷	不明	自作（歌の自撰）	写本	「嘉永七年寅春撰写」
同年6月	旭溪書捨	1 卷	不明	自作	写本（外）	「嘉永七寅六月予病中草稿、贈城下同行之写」
同年冬	報恩講式 嘆徳文	合 1 卷	京師	仏教（真宗）	板本	「冊表紙」 「於京師求之」
	賢首諸乘法数	1 卷	京師	仏教	板本	
同年冬至翌卯春	観經鼓吹 抜書	1 卷	不明	仏教	写本（外）	「自弘願寺借得而写」
右同年	地震日記	1 卷	不明	自作（日記）	写本（外）	「起寅冬至文久三亥歳而止合為九卷、右同年大變自記」
安政元（1854）年冬大變之節	草稿 迷悟指南車	1 卷	不明	自作	写本（外）	「安政元寅冬大變之節應城下同行需稿之」

安政2（1855）年初春	和漢年歴箋	—	不明	年表	板本	「折本赤表紙」
同年4月	谷陵記	1 卷	水道江口氏	災異	写本（外）	「安政二卯四月下院写、宝永大變記也自水通江口氏借得而写」
同年夏	無盡藏	1 卷	不明	不明	写本（外）	「横本」「安政二卯年夏造」
同年仲冬	御傳抄	1 卷	不明	仏教	写本（外）	「小本」
同年冬	佛国曆象編	5 卷	不明	天文・曆	板本	「所望人有之譲渡」、○
同年	二十四輩御旧跡圖	折本	関東	伝記	板本	「慈敷從関東持帰」
安政3（1856）年3月	真宗故実三十七ヵ條	1 卷	不明	仏教※	写本（外）	
同年5月	本願寺由緒畧記	1 卷	不明	寺院	写本（外）	
	鼎足編	1 卷	不明	自作	写本（外）	「應當山弟慈敷之需而自撰集之」
同年7月下旬	三首詠哥御文 五重義御文聞記	合 1 卷	不明	仏教※	写本（外）	
同年夏	御代々御書写	1 卷	不明	仏教	写本（外）	
安政4（1857）年仲春	成就文聞信編	1 卷	不明	仏教※	写本（外）	
同年6月	袖珍三体詩	3 卷	不明	漢詩集	板本	「小本」
同年夏	米利幹国語	1 卷	不明	自作	写本（外）	「安政四巳夏隨御使僧常徳寺之指圖別写二卷献上兩御門主様御前」
同年季秋	帰元直指	6 卷	不明	仏教	板本	
	清詩選	1 卷	不明	漢詩	板本	
同年9月	雅俗要文	1 卷	不明	往來物	板本	
安政6（1859）年季春	五雜俎	8 卷	不明	隨筆（漢籍）	板本	
	老子道德經	2 卷	不明	漢学	板本	
	郭注莊子	10 卷	不明	漢学※	板本	「所望アリ譲リ今ハナシ」、○
	一休狂歌問答	4 卷	不明	咄本	板本	「絵本」
	一休骸骨	1 卷	不明	仏教（臨濟）	板本	
	茶店問答	3 卷	不明	仏教（真宗）	板本	
同年5月	御俗姓 夏御文	1 卷	不明	仏教	板本	「小本」
	參詣心得草	1 卷	不明	仏教（真宗）	板本	「小本」
	京都指掌圖	—	不明	地図	板本	「小本」「折本」
同年季夏	殿中間答	一卷	イヨ国松林	思想	写本（外）	「イヨ國松林 從松林寺借得而写」

万延元（1860）年春	三関 横本青表紙	1 卷	不明	不明	写本 (外)	
	無不應 横本黄表紙	1 冊	不明	不明	写本 (外)	
同年首夏	古詩韻範	3 卷	不明	漢詩	板本	
	和漢年契	1 卷	不明	年表	板本	
	新撰年表	1 卷	不明	年表	板本	
万延2（1861）年2月	円光大師傳	1 卷	不明	仏教	写本 (外)	「自極楽寺借得而写」
同年5月（文久元年）	三界義誘蒙	3 卷	不明	仏教（天台）	板本	
同年10月	因果經繪鈔	5 卷	不明	仏教	板本	
	因果物語	1 卷	不明	仮名草紙	板本	
	朗詠集	2 卷	不明	詩歌集	板本	
同年11月	都名所圖会	11冊	不明	地誌	板本	
文久元（1861）年5月	御傳抄	2 卷	京都	仏教	板本	「就飛檐出仕御免於京都求之」
文久2（1862）年春	排佛語纂	1 卷	不明	自作	写本 (外)	「文久二戌春書始」
同年夏	林子	40卷	大坂	漢籍※	板本	「唐本、但古本、為大坂土産 從松下氏到来」
同年初秋	日蓮上人夢中問答	1 卷	小高坂嶋崎氏	仏教※	写本 (外)	「從小高坂嶋崎氏借得而写」
	土佐国風俗記	1 卷	同	風俗	写本 (外)	「同（小高坂嶋崎氏借得而写一鍋島注）」
慶應2（1866）年春	厭蝕太平樂記	15卷	不明	戦記	写本 (外)	「慶應二寅春起筆 依病発 停筆慶應三春再採筆写終」
慶應3（1867）年夏	渡海之船筏	1 冊	不明	自作	写本 (外)	「慶應三夏記真宗安心 永留自坊」
從若年時々拔書	雑書拔書	1 冊	不明	自作	写本 (外)	「横本」
不明	正信偈談録	1 卷	不明	仏教	写本	

注1：『朝陽山文庫書籍目録』より作成。

注2：『朝陽山文庫書籍目録』中にてくる書籍で、『国書総目録』や『古典籍総合目録』には書籍名が出てこない、または書籍名が一致しないものでも、書籍の名前から分野の推定が可能なものについても分類をしている。その場合には分野の後ろに※印をつけている。

注3：表中の□は史料中で判読できなかった文字。

注4：表中の○は本を讀るなどした為、現在は所有していない書籍を表わす。

表四:『旭溪随筆』より見る書籍の抜き書き

巻数	成立年月日	抜き書きした書籍	分類
『旭溪随筆』其一	嘉永2(1849)年春～嘉永4(1851)年冬	性霊集	漢詩文
		撰津名所圖會	地誌
		真俗懺記	不明
		谷響集	仏教(臨濟)
		山海里	仏教
		内外二典要語	不明
		廿四輩列次	仏教書※
		管公詩歌	不明
『旭溪随筆』其三	嘉永6(1853)年仲春～安政2(1855)年冬	一貫口訣鈔	神道
		文選撮要	漢籍※
		二十諸天列名	仏教※
		本草綱目啓蒙	本草
		廿四輩東西分弧	仏教書※
		婦命字訓	仏教書(真宗)
		孔方記	不明
		千代女秀吟	不明
		楞嚴院末迎味讃	仏教書
		白隠禅師丁加鈴	仏教書
		撰津名所圖會	地誌
		日本万物如元	不明
『旭溪随筆』其四	安政3(1856)年春～安政4(1857)年春	御文記曳珠	仏教書(真宗)
		十八羅漢頌	仏教書※
		一枚起請文	仏教
		百論題中研究	不明
		三社託宣	不明
		山海里	仏教
		六地藏名目	不明
		隣交徵書	漢詩文
『旭溪随筆』其五	安政4年秋～安政5(1858)年冬	常盤尊像略縁起	仏教※
		西域記	漢籍(地理書)
		仮名草紙命之親	不明
		妙好人傳	伝記
		陸沈畸談	伝記(土佐藩士伝)
		鉄研余滴	随筆
		和語灯録序	仏教書(浄土)
		三才圖會	漢籍(事典)
		謡本	謡曲
		唐宋名家史論奇抄	史論
『旭溪随筆』其七	安政7(1860)年初夏～同年仲夏	南北史摺華	不明
		淮南鴻烈解	漢籍
		近世人鏡録	伝記
		近思録	漢籍(儒学書)
		近思録	漢籍(儒学書)
『旭溪随筆』其八	万延元(1860)年仲夏～同年孟秋	山陽遺稿	漢詩文
		韓退之文集	漢籍※
		柳子厚文集	漢籍※
『旭溪随筆』其九	万延元年初秋～同年季秋	左繡	漢籍
		鈴録	兵法
		山海里	仏教
		山海里	仏教
『旭溪随筆』其十	万延元年季秋～万延2(1861)年仲春	空海法語	不明
		高田繪詞傳	不明
		謡本	謡曲
		古學先生文集	漢詩文
		山海里	仏教
		山海里	仏教
『旭溪随筆』其十一	万延2年季春～同年窮月	八代集目次	和歌※
		夢	謡曲
		山海里	仏教
		帖外九首味讃	仏教書(真宗)※
		涉成園記	漢詩文・書道
		通鑑要略	外国史
		詩學字引	辞書
		詩學字引	辞書

『旭溪隨筆』其十二	年月記載なし	詩學字引	辭書
『旭溪隨筆』其十三	年月記載なし	常山紀談	雜史
		常山紀談	雜史
		逸史	雜史
		續唐宋八大家讀本	漢詩文
		福惠全書訓譯	漢籍※
		星巖集詩	漢詩※
		唐宋名家史論奇抄	史論
		戰國策	漢籍(雜史)
		諸天寿量	不明
		性靈集	漢詩文
		山海里	仏教
		莊子口義俚諺抄	漢学
		選擇集講苑	仏教書(浄土)
		浄家末書	不明
『旭溪隨筆』其十四	年月記載なし	續近世畸人傳	伝記
		藥師如來十二上願	仏教書※
		現益讃勸導	仏教書※
		記載なし	

注1 :『旭溪隨筆』より作成。

注2 :『旭溪隨筆』中にてでくる書籍で、『国書総目録』には書籍名が出てこない、または書籍名が一致しないものでも、書籍の名前から分野の推定が可能なものについても分類をしている。その場合には分野の後ろに※印をつけている。

注3 :表中の□は史料中で判読できなかった字。

表七:『真覚寺日記』にみる読書記録

年月日	書籍名	分野	本の所有者及び読書の場所
安政3(1856)年2月3日	六韜	漢籍(兵法書)	不明
3月19日	太平記	軍記物語	本丁(大徳屋)
4月19日	太平記	軍記物語	本丁(大徳屋)
6月7日	北越雪譜	地誌	本丁(大徳屋新宅)
6月17日	北越雪譜	地誌	本丁(大徳屋新宅)
6月18日	曆算全書	漢籍(暦学・数学)	松下与膳
6月18日	周髀算經	漢籍(天文)	松下与膳
6月19日	謡本	謡曲	横町(舩永屋)
6月20日	謡本	謡曲	横町(舩永屋)
8月21日	後日怪談浮名簪	浄瑠璃	横町(升永屋)
9月20日	唐宋八家文	漢詩文	松下与膳
10月18日	科註法華經抄	仏教書	大徳屋
安政4年1月20日	諸道ノ枝折	自作	横町(舩永屋)
7月27日	三畧六韜	漢籍(兵法)	不明
9月18日	三災録	災異	本丁(大徳屋)
9月19日	三災録	災異	本丁(大徳屋)
安政5年3月24日	源平盛衰記	軍記物語	不明
8月20日	類聚国史	通史・類書	松下与膳
8月20日	中華沿革図	不明	松下与膳
8月20日	新撰年表	年表	松下与膳
10月19日	史記	漢籍(史書)	松下与膳
10月19日	評林	不明	松下与膳
10月19日	韓昌黎文集	漢籍	松下与膳
10月19日	鉄研余滴	随筆	松下与膳
安政6年1月19日	雲上明覧	名鑑	升形(大徳屋)
2月20日	宋ノ蕪氏ノ文伊勢ノ斎藤氏の古今を論せる文集杯	不明	松下与膳
3月24日	五雜俎	漢籍(随筆)	静照
4月13日	郭註莊子	漢学	静照
6月22日	莊子	漢籍(儒学書)	不明
8月21日	法華經科註	仏教	千蓮寺
9月20日	史記ノ項羽傳	漢籍(史書)	松下与膳
9月20日	關邪小言	漢学	松下与膳
安政7年1月4日	周易注本	漢籍(儒学書)	松下与膳
1月4日	東華錄	漢籍(史書)	松下与膳
万延元(1860)年3月23日	逸史	雜史	不明
3月28日	逸史	雜史	不明
閏3月1日	逸史	雜史	不明
閏3月2日～12日	常山紀談	雜史	不明
閏3月13日～4月5日	日本外史	通史	不明
4月7日～4月12日	唐宋名家史論寄抄	史論	不明
4月24日	南北史	不明	不明
4月25日～5月朔日	淮南子	漢籍	不明
5月2日～9日	近世人鏡録	伝記	不明
5月9日～11日	近思録	漢籍(儒学書)	不明
5月11日～23日	山陽遺稿	漢詩文	不明
5月24日	韓柳全集	漢籍	不明
5月29日	内外ノ典籍	不明	不明
7月9日	韓退之柳子厚文集	漢籍	不明
7月23日	左繡	漢籍	不明
7月23日～9月8日	鈴録	兵法	不明
9月17日	高田派繪詞伝	不明	不明
9月18日	遊口目録	不明	不明
11月22日	山海經	漢籍(地理書)	升形(大徳屋)
12月23日	古學先生文集	漢詩文	不明

文久元(1861)2月23日	東華録	漢籍(史書)	松下与膳
4月10日頃	福恵全書刑名部	漢籍	不明
7月20日	妙好人傳	伝記	升形(大徳屋)
7月22日	靖獻遺言	漢学	不明
7月22日	通鑑摩要	外国史	不明
10月1日	隣交徴書	漢詩文	不明
10月19日	冠齡八旬集	漢詩文	不明
11月3日	和漢朗詠集	歌謡	不明
12月19日	山陽遺稿	漢詩文	不明
文久2年2月3日	常山紀談	雑史	不明
2月10日	續唐宋八大作文讀本	漢詩文	不明
2月21日	山海里	仏教	升形(大徳屋)
2月21日	好人傳 (『妙好人伝』のことか)	伝記	升形(大徳屋)
3月8日	山陽傳抄	不明	不明
3月26日	福恵全書刑名部	漢籍	不明
5月7日	古今集遠鏡	和歌・注釈	静照
7月19日	太平記	軍記物語	升形(大徳屋)
8月26日	林子	漢籍	静照
閏8月19日	四戦記	戦記	嶋崎清七
閏8月19日	国史略	通史	嶋崎清七
閏8月19日	西山遺寺	不明	嶋崎清七
9月19日	鎌倉見聞記	不明	升形(大徳屋)
11月20日	太子傳圖會	仏教書	不明
文久3年3月22日～ 4月朔日	圓光大師行狀翼賛	仏教書	不明
4月5日	起信論義記	仏教	不明
4月5日	忍微和尚行業記	仏教	不明
4月5日	一枚起請梗概聞書	仏教(浄土)	不明
4月10日	孫氏	漢籍(兵書)	不明
4月10日	呉子	漢籍(兵書)	不明
9月2日	日本史義経傳	歴史	不明
10月19日	謡本	謡曲	不明
文久4年1月19日	現世利益和讃勸導	仏教書(真宗)	升形(大徳屋)
2月19日	伊呂波哥邪正弁	仏教書(日蓮)	升形(大徳屋)
2月19日	法花問答	仏教書	升形(大徳屋)
元治元(1864)年10月19日	中外機誌	外事	松下与膳
11月8日	中外機誌	外事	松下与膳
元治2年1月19日	山海里	仏教	升形(大徳屋)
1月19日	好人傳 (『妙好人伝』のことか)	伝記	不明
慶應元(1865)年閏5月12日	帰元直指	仏教	不明
7月19日	二十四輩記圖會	仏教	升形(大徳屋)
慶應2年1月17日	妙好人傳	伝記	上町
5月20日	北齋漫画	絵画	横町(升永屋)
慶應3年4月28日	愚迷発心集	仏教	静照
8月20日	養生弁	医学	不明
8月22日	二十四輩記	仏教	不明
慶應4年壬4月2日	公武一覧	不明	極楽寺
5月6日	出世の意思図絵	絵双六	静照
6月9日	太政官日記	記録	高知(誰であるかは不明)
7月26日	古今妖魅考	考証	松下与膳

注1:『真覺寺日記』より作成。

注2:表中の□は史料中で判読できなかった字。